



泉の
おねえちゃん先生

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

本文：クロギリ
イラスト：こおりみず

目次

泉会のおねえちゃん先生……………	3
大滝あさがお園のしおりせんせい……………	73
おまけ……………	109

泉会のおねえちゃん先生

▼ 1

「ねえっ先生っ、つぎ先生のばんだよっ」

「ほらあ、せんせえ、はやくはやくーっ!」

貸切バスの中に元気な声がこだまする。泉会の子供たちは今日も朝から元気いっぱいだった。

泉会は、地域の学校に通う生徒達が参加する仲良し交流会である。普段は放課後の知育や週に一度のお遊戯会などを中心に活動し、クラスや学年の垣根を超えた交流を育むのが目的だ。春や秋には土日遠足で遠隔地まで足を伸ばすこともある。

会の運営は町内会の有志によって行われており、学校に通う子供を持つ母親達がおもに『先生』役を務め、協力してさまざまな行事を行っている。薄い空色に緑の縁取りをしたエプロンはこの泉会の『先生』たちのトレードマークとして有名だった。

天高く晴れ渡る青空の下、穏やかな日差しが包む秋の土曜日。格好の遠足日和とあって、バスの中の子供たち

のテンションは早くも最高潮。出発間もない車内のそこかしこで賑やかに騒ぐ子供たちに、先生たちはみな大忙しだ。

「じゃあね、じゃあねっ、つぎあたしね、あたし!」

「ずるいぞ、おれのほうが早かったろー!」

ゆっくりと海沿いの道路を走るバスの中、わがまま盛りの子供たちが口々に声をあげる。わんぱくな男子におしゃまな女子、揃って元気いっぱいに勉強し、遊ぶのが泉会のモットーである。

そんな、賑やかなバスの中。

「ねえおねえちゃんっ、はやくっ、ねえってばーっ」

「あーっ、あれ、おねえちゃん先生っ、あれみてっ」

「おねえちゃん、まだー? ぼくずっと待ってるんだよっ」

忙しなく行き来する大人の『先生』たちの中に混じって一人、同じ空色のエプロンを付けた少女の姿があった。

「ねえーおねえちゃんっ、おねえちゃんってばー!!」

「う、うん、ちょっと待ってね?」

ぐいぐいと服の袖を引っ張ってお遊戯への参加を促す子供たちに囲まれて、泉会の『おねえちゃん』こと前原詩織の額には薄く汗が浮いていた。

他の『先生』が皆、子供たちの母親かそれ以上の年齢と見受けられる中であって、詩織の年齢は明らかに浮いてみえた。活動的なシャツと短いスカートの上、サイズを持って余した空色のエプロンはまだ真新しく、子供たちの相手もどこかぎこちない。

「ちよっと、おれが先だぞー!」

「あたしのほうが先だってばー!!」

「えーっと、うん、それじゃあ、一緒にやろうか。ね?」

「いいよね?」

「うん」

詩織の将来の夢は、保育士さんになることだ。それこそ泉会の子たちよりも小さな頃から、ずっとそれが夢だった。そのための経験として、詩織は学校の休みにこの泉会で先生のお手伝いをさせてもらっているのだった。

もちろんまだ学生の詩織に正式な資格などがあるわけではないので、あくまで会の手伝いという形である。

右も左も解らず最初は戸惑うことばかりだった『先生』としての生活も、二ヶ月という時間を経て、次第にはあるが馴染むことができていた。

年齢が近いということもあって積極的に詩織を遊びに誘う子供達のグループもあり、最近ではすっかり『おね

えちゃん先生』として打ち解けている。

「ねー、おねーちゃん先生え、はやくはやくっ!」

「はやくってばあ!!」

「ちよ、ちよっと待つてようっ……!」

秋も盛りの今日は、年に二回の遠足の日だ。目的地は県の西にある森林公園のアスレチックコースである。待ちに待った遠足とあって、子供たちのはしやぎようもひとしお。いつも以上にお行儀の悪い子供たちを相手に、バスに同乗している泉会会長の新藤先生、付き添いの弓野先生、赤坂先生も揃っててんてこ舞いだった。

もちろん詩織だって例外ではない。朝から気の休まる暇もなくみんなの世話に追われている。

人気の『おねえちゃん先生』である詩織は子供達に引っ張られてバス後部座席の真ん中に座りされてしまい、お遊戯にしりとりにお歌にと大人気だった。車酔いなんてどこ吹く風と、目まぐるしく入れ替わっては「じゃあ次これね!」「違つよ次はこの遊びね!!」とせつついてくる子供たちに、バスの出発前からずっと振り回され続けである。

小さい体に元気いっぱいの子供たちに取り囲まれ、詩織が目回しそうになっていた時。新藤先生の拍手がバ

スの中に響く。

「はあい、みんな注目ー。聞こえるかなー？ これ、何かなー？」

あわせて流れ始めのは聞き覚えのあるイントロ。流行のテレビ番組の主題歌だ。皆が好きな曲を絶妙にチョイスした選曲に、子供たちの注目が一齐にそちらを向く。

「はい、これ歌える人ー！ うん、みんな元気ね。じゃあ一緒に歌いましょう。できるかな？」

「はいーごーらー」

新藤先生は元本職のベテランである。流石の貫禄で車内の子供達の興味を集め、場の空気をしっかりと掴んでいた。

「はい、じゃあ、さん……はい！」

「~~~~~」

たちまち始まるバスの中の大合唱。子供達が思い思いに主題歌を合唱し始める。

詰め寄られていた子供達から解放されてほっと胸をなでおろす詩織に、新藤先生はやれやれと肩を竦めた。

さりげなく詩織の負担を軽くしようという取り計らいだ。新藤先生に小さく何度もお辞儀をして感謝を伝え、

詩織はちらりと窓の外に視線を向ける。

「……………」

大合唱の子供達、40人を連れて、バスは一路、海沿いの国道をひた走る。ほどなく県央を抜ける有料道路に入って、後は目的地へ一直線だ。

泉会の子供たちも、先生たちも。揃って歌声を重ねるほほえましい光景の中、詩織だけがどこか硬い表情のまま、何度かバスの外の様子を気にしている。車内の大合唱の中にもほとんど声は聞こえず、形の上で口の動きを合わせている程度だ。

もともと落ち着きなく座席の上に座る位置をずらし、手のひらはそっと空色のエプロンの上からおなかの上に添えられて。

宙に視線をさまよわせ、少女は下腹部を撫でさすり続けている。

「っ……」

がこん、がこんとバスが道路の継ぎ目に小さく車体を跳ねさせるたび、詩織は小さく唇を噛み、緊張に身体を硬くした。

エプロンの下ではハーフパンツの足がきゅうっと寄せ合わされ、太腿が不自然に上下を繰り返す。

硬く強張る表情は、余裕なく切羽詰まった少女の窮地

を示しているかのようだ。

「……せんせー?」

「……………」

「ねー、せんせえー?」

どちらかと言えば引っ込み思案の詩織だが、子供たちと遊ぶのは大好きだ。それなのに今日はどこか上の空。二番に入った合唱も途中でやめてしまつて、口をぎゅつと閉じている。

普段とはちよつと違つ『おねえちゃん先生』の様子に氣付いた近くの子供たちが、次々に首を傾げた。

「ねえ、おねえちゃんせんせー、どーしたの?」

「……えっ?」

「きもちわるいの? 先生呼ぶ?」

「うっ、ううんっ、なっ、なんでもないよっ!」

いけないことを指摘されたかのように慌てて首を振り、詩織は笑顔を浮かべてみせた。けれど、その取り繕い方は子供達からしても不自然さの残るもので。

疑問のはてなマークを浮かべたままの子供たちを促すように、詩織は空元氣をつくつて声をあげる。

「……な、なんでもないから。ね? ほら、お歌、一緒に歌おう? さん、はいっ」

子供たちは素直だ。しかし、決してそれは理解や認知が大人に劣っているという訳ではない。むしろ彼らは柔軟な発想と洞察力で、普段から慣れ親しんだ『おねえちゃん先生』の態度の違和感をはつきりと感じ取つていた。まだ納得いかないと言つた表情のまま、合唱に戻る子供達。

(どうしよう……っ、氣づかれちゃつた、かも……) 必死になつて表情を作ろう詩織の背中には、じつとりと氣持ちの悪い汗が伝う。

真新しい空色エプロンの下で、きゅつと閉じ合わされた膝の間にスカートを挟み込み、少女の脚は忙しく動き続けていた。氣付かれないようにと精一杯のさりげなさを装いながら、少女は座席の上で左右に体重を動かし、リズムを取るように腰を揺する。

下腹部に当てられた手のひらにぐつと力が籠もり、そわそわ小刻みにと動く剥き出しの太腿が時折、きゅつと閉じ合わされてはエプロンを挟み込む。

「……んー? ……ねえ、おねえちゃん先生、へいき?」
「ぜ、全然だいじょうぶっ、なんともないから。……ほ、本当になんでもないから。さ、次のお歌だよ?」

詩織のすぐ隣。じつとその顔を見上げて聞いてくるユ

ミに笑って答え、そっとその背中を叩いて促す詩織。
取り繕った笑顔の下で、詩織の心はまったく別のことに囚われ続けていた。

子供達に合わせて選んだ、活動的な短めのスカートと、『先生』の証たるエプロンの下。道路を跳ねるバスの振動に合わせ、下腹部をしきりに刺激し、股間の恥骨へと走り抜けるむず痒くも甘い誘惑。

「……………」

ぎゅうううつと、とエプロンの上で少女の手が握り締められる。

切ない訴えを形にするように。焦がれる欲求を手繰ろうとするかのように。

(トイレ……………)

トイレ。お手洗い。

ご不浄、お便所。

それが、いまの詩織の心をつらえて離さない、本心からの切なる願いだった。

「っ、はあ……………」

熱の籠もった吐息が、少女の唇を震わせる。

窓ガラスを白く染める切なげな少女のため息。堪えた欲求が、下腹部のなかで刻一刻と膨らみ続けていた。

(……………おトイレ、行きたい……………おしっこ、おしっこ、したいよお……………)

白い跡を残した窓の外、流れる光景がぐるりと変わる。海沿いの大通りを折れ、貸切バスが有料道路へと入ったのだ。ETCを潜り抜け、時速80キロの高速移動を始めた密室の中。

泉会の『おねえちゃん先生』は、いよいよ切羽詰まった尿意に必死の抵抗を続けていた。



まったくもって、とにかくタイミングが悪かったとしか言いようがない。今日が遠足であることはずっと以前から決まっていた予定であり、詩織はそれに備えて万全の準備を整えていた。なにしろ、普段のお遊戯会や行事には慣れたとはいえ、『おねえちゃん先生』となった詩織には初めての遠出である。

だから詩織はカレンダーのその日にしっかりと赤丸を付け、事前に宿題や習い事の課題もきちんと済ませて準備

備を終えた。服も用意したし、必要な荷物だって何日も前から用意してきた。

たった一つ間違えたことと言えば、昨日の夜、お風呂に入る前にトイレに行かなかったことくらいだ。

初めての遠足の付き添いを前に、すっかり緊張していた事が理由だったのだろう。行程の確認や天気予報のチェック、荷物の整理などを気にかけているうち、時計の針がずいぶん遅い時間を指していることに気付き、詩織は慌ててベッドに潜りこんだ。

バスの出発は8時半。準備や打ち合わせのために先生達は7時半には地区の自治会館に集合ということになっていた。その前に朝食や身支度を済ませ、待ち合わせ場所に出発しなければならない。学校に行くよりも早起きしなければならない以上、早く寝ておかなければならないのは当然だった。

緊張のこともあって眠れるかと少し不安だった詩織だが、5分もせずに深い眠りに落ち——気づけばアラームがけたたましく鳴り響く朝であった。

「……?」

見れば、時計は目覚ましをセットした時間よりも20分も過ぎていた。寝ほけながら、何度か目覚ましのスヌ

ーズボタンを押してしまったらしい。

「大変……!!」

慌ててベッドから飛び起き、朝ご飯の代わりに牛乳たつぶりのカフェオレと野菜ジュースを一気飲み。髪をとかして着替えと身支度を済ませ、さあ出発と鞆に手を掛けたところで。

「……んうっ……」

下半身から沸き起こったむず痒い感覚が、少女の背筋を伝って這い上った。

ぞわぞわと背中を伝う感覚は、日常の中にありふれた小さな危機感。

——つまり、尿意。

トイレに行きたい。

おしっこしたい。

じんと脚の付け根に広がる切ない欲求が、少女の足をふらつかせる。

下腹部に膨らむ尿意は見る間に存在感を増し、熱い疼きの脈動となって詩織に排泄の要求を訴えかけた。

(……やだ……っ)

突然に強まる尿意を前に、いつの間にと困惑する詩織であるが、良く考えてみれば当たり前の話で、詩織は昨日の夕食を摂ってから、一度もトイレに入っていないのだった。

思い出してみれば昨晚、ベッドに入る時、一瞬だけそのことが脳裏をよぎったのを覚えている。

とはいえ、別段その時はとくに行きたかったわけでもないし、もうとっくにおねしょなんて卒業している。行きたくなったら目が覚めるだろうと思っただけ、そのまま眠りについたのだった。

押し寄せる忙しさと緊張にすっかり放水許可を後回しにされた乙女のダム。しかし健康な少女の身体機能は夜の間にも休むことなく、全身を巡る血液から水分と老廃物を抽出しては、せっせとダムの内部へと注ぎ込み続けていた。閉ざされた水門の奥で、いつしかその水位は危険水位を突破しつつあったのだ。

一般的に、睡眠中は自律神経の働きと、身体が弛緩していることから尿意を感じにくい。また、横臥状態では重力も体に対して横向きに働き、膀胱も普段よりも大きく拡張される傾向にある。朝起きて一番のおしっこが、勢い量ともにすごいのはこれが理由だ。

寝起きの直後もこの状態はしばらく持続するが、ほどなく目を覚ました身体は正常な働きを取り戻し、正しく尿意を発することになる。

前触れもなく詩織を襲ったかに見えた尿意は、まさにこの『危険信号』がようやく届いた瞬間だったのだ。

「っ……………」

しかし、詩織本人にしてみればそれはあまりにも突然の事。身構える余裕もなく押し寄せたトイレの欲求は、思わずその場に足を止め、もじもじと膝を擦り合わせてしまっただけだった。

慌てて鞆を放り出し、すぐにトイレへと向かおうとしたに詩織だったが——しかし、この時不幸にもすでに家のトイレは塞がっていた。

詩織の父は、トイレで新聞を熟読するのが日課だった。何度家族が止めてと言っても聞かないこの父の悪癖によって、前原家の朝のトイレはほぼ封鎖状態となるのである。

普段は父の通勤時間と詩織の通学時間の差によって、これががち合うことはなかったのだが——休日ということもあり、早起きした詩織のバイオリズムとこれが見事にぶつかってしまったのだ。

「ねえ、お父さんっ、まだ?」

固く閉ざされたドアを前に何度ノックを繰り返しても、帰ってくるのは「うん……」「ああ……」といった生返事のみ。占領されたトイレが開放される気配は一向に見られない。

「もうっ……! お父さんっば!」

焦る気持ちの中、見上げた時計の針は無情に進んでいる。元々あまり余裕もなかったが、そろそろ出かけないと走っても間に合わなくなる時間だ。

「お父さんっば! はやくしてよ!」

「……ああ、そうだな」

「ちよっと、お父さんっ!」

繰り返される生返事。踵を小刻みに踏みながら、再度強めに試みたノックにも、内部からの応答はない。

「……いいよもうっ!」

ついに諦めた詩織は、踵を返して部屋へと戻る。

詩織として思春期の少女である。たとえ家族相手であっても、あまり大声で何度もトイレを訴えるのは気恥ずかしかったのだ。

出発の時間が迫ってきたこともあり、少女はここでの排泄を諦め、家を出ることを決断したのだった。

(いや、少しくらいなら、まだ大丈夫……)

「おしっこしたいけど、我慢しよう。」

そう。

この時の詩織はまだ、迫る尿意を深刻に考えてなどいなかった。ごく単純に、出発前に自治会館のトイレを使わせてもらおうなどと、暢気なことを考えていた。

だが。

結論から言えば、この決断はあまりにも軽率であった。目の前のトイレを後回しにし、詩織が家を出た時点で、あらゆることがもう既に手遅れだったのである。

▼ 2

『いいですか、前原さん。大事なお話です。』

……明日から前原さんには『先生』の一人として、私達のお手伝いをしてもらうことになります。

けれど、そのためにひとつだけ、大事に心に留めておいて欲しいことがあります。

今あなたに渡したこのエプロンがありますね。ええ、それです。このエプロンは、この泉会の『先生』であることが解るように身につけているものです。

私達は『先生』として、たくさんの子供たちを預かるとても大事な役目をしています。このエプロンはその責任を持つことの証です。

いいですか？ あなたは正式な先生ではありませんが、子供たちから見ればあなたも立派なおとなです。ほかの先生たちと同じように、このエプロンをしているあなたは『先生』なんです。だから、これを身につけている間、あなたは決して、周りの人に甘えたり文句を言ったりし

てはいけません。

きつと、大変なことも、辛いこともたくさんあるでしょう。でも、泣き言は言わずに、ちゃんと我慢しなければなりません。くれぐれも、自分の勝手にわがままを言って、他の先生や子供たちを困らせたりすることのないようにしなければいけませんよ。わかりましたか？

……ええ、そうです。それにね、なにも子供達に限ったことではありません。会の人に限らず、世の中の人達から見れば、このエプロンを付けたあなたは立派に、泉会の『先生』と同じように見えるかもしれません。

そんな時に責任を持たず、好き勝手なことをしていればどうなるか、……わかりますよね？

だから、このエプロンを身につけていて恥ずかしくないような、みんなのお手本となるような、良い『おねえちゃん』でいるようにしなければいけませんよ。

これだけは、決して忘れないようにしなさいね』



「っ……」

揺れるバスの中、詩織はぎゅっとくちびるを噛みなが

ら、『先生』としての生活の初日に新藤先生から言われたことを思いだしていた。

貸切バスはごく普通の移動用のもの。もちろんトイレなど付いておらず、車内に詩織がオシッコを済ませられる場所などどこにもない。

そうなれば詩織が取れる方法はただひとつ。押し寄せる尿意にじっと身を固め、ただ我慢するのみである。

少女の身を包む、緑の縁取りをされた空色のエプロンは、詩織が子供達のお手本とならなければいけない『先生』であることを示す証だ。

他の『先生』だって大忙しなのに、詩織が自分一人の都合でワガママを言う事は許されない。

だから、詩織は辛い気持ちを飲み込み、唇をきつく閉じて、強まる尿意をぐっと押し殺すしかなかった。

（がまん、がまんっ……）

大丈夫。我慢できる。トイレなんか行かなくても平気。自分に言い聞かせるように小さく繰り返される言葉。

しかし、気にしないようにと思えば思うほど、おなかの中のオシッコはどんどんとその存在感を増してゆく一方だった。

走るバスの振動に合わせて腰骨に響くツンとした刺激

は、トイレを求めるイケナイ誘惑。

じんと股間を走り抜ける甘い痺れに、詩織は慌ててぎゅっと脚を閉じ合わせた。

薄青のエプロンの下、スカートの布地を巻き込んでびったりと寄り添った膝が細かく震え、ひっきりなしに緊張と弛緩を繰り返す。

汗の滲んだ下着が肌張り付いて、不快感と嫌な連想を呼び起こす。詩織は不安定にざわめく下腹部をそっと撫でさすった。

「ん……っ」

じいんっ、腰骨を伝い響く水の誘惑。少女の唇が薄く開き、かすかな吐息が漏れる。

エプロンの上からでも、下腹部はきつく張りつめ、軽く押さえるだけでもぞわりと少女の背中を震わせた。詩織がおなかの中に抱え込んだヒミツの『水風船』には、すでに相当な量のおしっこが溜まっている。

おなかの中に膨らむ水風船が、走るバスの振動に合わせて、たぶん、たぶんと揺れる。それを手のひらで擦ってなだめながら、詩織はバスの窓へと視線を向けた。

合唱に夢中の子供達には気付かれないように、窓の外を通り過ぎてゆく標識を探す。

(「だいじょうぶ……もうすぐ、あとちよつとで、休憩時間だから……」)

予習の甲斐あって、遠足の予定はすっかり頭の中に叩き込まれていた。

今回の遠足の目的地、森林公園まではけっこうな距離がある。この先のサービスエリアでバスは一度停車し、休憩を挟む予定なのだ。

残りの距離は正確には解らなかったが、そこまでガマンを続けければ、トイレに行くことができる。

(「え、ええとっ、あと5キロくらい……かな? ……それじゃあ、あと……んうっ!」)

がたん。軽く跳ねたバスの車体に、詩織の下腹部にじんと強い衝撃が走った。少女は咄嗟に身を丸め、ぎゅっと膝を強く寄せ合う。

座席シートの上、おしりから伝う振動に、固く閉じ合わされた水門が震える。

「っ……はあ……っ」

口元に手を押し当て、熱い吐息を押しさえ込みながら、詩織は涙の滲む視線を上にあげた。

くじけそうになる心を奮い立たせ、バスの前方にあるデジタル時計を見上げる。表示は午前9時26分。

(「え、えっと……あ、あと……あとちよつとだから……! あと少し、ほんのちよつと、ご、5分……だけ、5分だけ、我慢……っ!!」)

実際に何分かかるのか、詩織にはわからない。だからその『5分』も本当の事かどうか定かではない。

だが、今の詩織にとっては、長い時間おしっこを我慢しろなんて、とてもではないが無茶な注文に思えた。

だから口の中で小さく『あと5分、5分だけ』と繰り返しながら折れそうになる心を励まし、乙女のダムの入りを塞ぎ止める。

(「が、我慢、しなきゃ……あとちよつとだけ、がまんして、そうすれば、トイレ……行けるんだから……っ!」)

もうすぐトイレにつく。もうすぐおしっこできる。それだけを希望にして、詩織は今にも緩み出しそうな股間の代わりにバスの座席の手すりを握り締める。

——その時だった。

「ねえ、本当にダメ? おトイレ我慢できないの?」
「——っ!」

唐突に声をかけられ、詩織は飛び上がりながら驚

いた。

(うそ、き、気付かれちゃった……?!)

なんとしても隠しておかねばならないはずの尿意を言い当てられたことに真っ赤になって振り向く詩織。

しかし、その言葉は詩織ではなく、詩織の一つ前の席に座る、泉会の生徒の一人に向けられたものだった。

「ねえエリちゃん、もうすぐ休憩のサービスエリアに着くんだけど、ダメ?」

「……っ、……うん……だめ、でちゃうっ」

身体をかがめて訊ねる弓野先生に、座席の上、小さな体を固く強張らせてエリは小さく頷く。いとけない表情はすっかり青ざめ、切羽詰まって震えており、もはやまったく余裕がないことは明らかだった。

弓野先生は困惑も露わに、参ったなあど頬を搔く。

「エリちゃん。出発の前に先生言ったよね? それなのにおトイレ、行っておかなかったの?」

「……うん」

「もー。先生のいう事聞かなきゃだめよ、エリちゃん」「ごめんなさい……っ」

顔を真っ赤にして俯くエリに、はあと大きいため息をつく弓野先生。

(……エリちゃん……も……?)

お手洗い。トイレ。おしっこ。

詩織のすぐ側で、エリもまた、迫り来る尿意と一人孤独に戦っていたのだ。

エリは、会の中でも目立つくらいとても活発な少女だった。いつも男の子たちに交じって元気良く外で遊んでいる。遠足ともなればそのはしゃぎようはひとしおであるはずなのだが、思い返してみれば確かに、今日はずいぶんと静かだった。

不思議には思っていたものの、詩織は自分の尿意に手一杯で、彼女もまたオシッコを我慢し続けていたことに、まったく気づいていなかったのだ。

(わ……エリちゃん……すっごく辛そう……)

こくり、小さく詩織の喉が震える。

思わぬ『同志』の出現に、詩織の心にはエリへの共感すら芽生えはじめていた。

もう、よほど余裕がないのだろう。普段は落ち着きのない足はぎゅっと閉じ合わされ、小さな手のひらはぎゅっと脚の間を押さえている。

いとけない顔を赤くしながら俯かせて、わずかに身じろぎしながらもじもじとおしりの位置を動かしている様

子は、改めてエリが女の子であることを強く詩織に意識させた。

「せ、せんせえ……っ」

「あ……仕方ないわね……ねえ、前原さん」

「え、あ、は、はいっ」

弓野先生に突然話を振られて、詩織ははっと我に返る。

「えっとね、悪いんだけど、新藤先生に話をしてもらって、運転手さんに一度バスを止めてもらえるように頼んできてくれる？ これ、ちよっともエリちゃん無理そうだしさ」

「む、無理そう、って……その、」

「わかるでしょ？ もう仕方ないもの。そこでさせちゃうから」

視線で窓の外、道路の隅を示す弓野先生。

もう、仕方がないから。

そこで。

オシッコ、させちゃうから。

(そ、それって……っ)

弓野先生の言わんとしてることを察し、詩織はぎゅ

っと唇を噛んだ。同時にきゅうん、と詩織の下腹部でも甘い疼きが走る。

「え、えっと……」

「ほら、早くしてあげて。エリちゃん我慢できなくなっちゃうわ」

「は、はいっ」

急かされるままに席を立ち、詩織は重たいおなかを抱えながら、バスの通路を運転席後ろの新藤先生の所まで歩いてゆく。高速道路の震動が靴の裏からダイレクトに震動を伝え、恥骨に危険な感覚が伝播してゆくが、今はそれどころではない。

「あ、あの、新藤先生」

「なにかしら？」

「それが……」

「……ええ!? 本当？」

話を聞くなり新藤先生は額に皺を寄せて小さく呻いた。「もうすぐサービスエリアなのに、我慢できないの?」

「えっと、その……む、無理みたいですよ」

「困ったわねえ……随分予定より遅れてるのよ? 他の子だって行きたがるかもしれないし、あんまりワガママ放題にさせてもねえ……」

「……………」

あたかも自分の尿意を見透かされているようなやりとり、詩織は頬が赤くなるのを抑えられない。当然ながら、この会話はすぐ近くの運転手さんにも聞こえているのだ。まるで自分が、オシッコが我慢できなくてバスを止めて欲しいと頼んでいるみたいなきぶんになる。

詩織はもう大人で、『おねえちゃん』なのに。みんなのお手本にならなければいけないのに。

きゅーんと下腹部で訴える尿意を押さえ込み、詩織は口早に言葉を継いだ。

「で、でもエリちゃん、もうダメそうなんです……弓野先生もエリちゃんの所において、早くしたほうが、って」

少女のプライドが意地を張って、もう我慢ができないのは自分ではないのだと、無意識のうちにエリの名前を強調してしまう。

ぎゅぎゅっと交互にその場に足を踏み換え、地面を踏みながら腰を捻り、詩織は込み上げてくる下腹部の疼きを押し隠した。

「……………」

「……どうしますっ?」

「そうね、仕方ないわ。止めてあげて?」

しばらくの沈黙の後、新藤先生は大きく息を吐いた。

訊ねる運転手さんにそう答え、先生も席を立って後部座席の方に歩いていく。

同時、バスが路肩に寄ってゆっくりと減速する。すぐに止まるのではなく、高速道路の左端、ちょうど崖を覆う石垣の側に近付いたのは、せめて他の車から見えなくなるようにという運転手さんなりの気遣いだろう。

詩織はぎゅっと手摺りを握り締め、慣性の法則による衝撃に耐えた。

(あ……………うっ)

ブレーキの反動で、おなかの中に閉じこめてある恥ずかしい液体がたぶんと揺れ、股間の疼きはおしりのほうにまで伝播してゆく。

通路に立って膝がくっついたおぼつかない脚では、バランスを崩さないように立っているだけでも辛いことだった。

「ほら、あとちょっとよ。頑張ってるね」

「…あう……………で、でちゃう……………お、しっこお……………」

「大丈夫よ、大丈夫だからねっ」

バスが停車するが早いか、ぐったりしたエリを抱えるように手を引いて、新藤先生が大急ぎでやってきた。慌

てて身を反らした詩織の前を横切り、空いたばかりのバスの外へ。

「はい、みんな、ちゅうもーく！ ちよつと思ひ出し
てね？ この前のお話、ちゃんとおぼえてるかなー？」

一方、突然の急停車にざわつく子供たちの関心を反らすため、弓野先生が新しいお遊戯を始める。

……そんな中。

ドアから飛び出し、停車したバスの陰に姿を消す二人の後ろ姿から、詩織は目が離せなかった。

(いいな、エリちゃん……っ)

わたしもトイレに行きたい。

おしっこ、したい。

もう立派なオトナとして、『おねえちゃん先生』として。あまりにもみっともない羨望だと解っていて、詩織はそう思うことを止めることができなかった。

本当なら、『先生』である詩織は、自分よりも小さなエリがずっと困っていたのに気付けなかったことを反省しなければいけないのに。

(っ……トイレ……わたしもおトイレ、行きたい……っ、

お、おしっこ、したい……っ！)

切羽詰まった生理的欲求が、少女の心を衝き動かす。詩織の右手は知らないうちにエプロンのポケットを探り、その中に収められているポケットティッシュを握り締めていた。

「……ん、んううっ……」

決してやってはいけない、イケナイ考えだとわかっているのに、その想像は止められない。おなかの中を蹴飛ばすオシッコの刺激が詩織の理性をぐらつかせる。

いまずぐに、ここで。停車したバスの物陰で、自分も一緒にオシッコを済ませてしまいたいという考えが詩織の頭を占領してゆく。

ほんの数m先で、エリは詩織がしたくてたまらないことをさせてもらっているのだ。下腹部を強い尿意に苛まれ、こんなにもつらい我慢の最中にある詩織には、うらやましがらな、と言うほうが無理な相談だった。

(ど……どうしよう……っ、も、もう、私も、がまんっ……できないかも……っ、っはあ、と、トイレ、おトイレ、私も、おしっこ……っ！)

「……ちゃんっ」

いつしか、詩織はとんでもない妄想に身を委ねようと

していた。立派な『おねえちゃん先生』として、思春期の少女として、絶対に考えてはいけない、みっともなくもはしたない想像。

身に付けた『先生』の証のエプロンの下で、知らず詩織の下半身がぎゅっとよじられる。

（い、今のうちにバス降りちゃえば……そ、そうだよ、今ならまだ、エリちゃんも、時間かかると思うし……ば、バスの前のほうなら、気付かれないうちに……っ）

ちらちらとバスの外へ視線を送り、羞恥心と下腹部の欲求の駆け引きに葛藤し。

詩織は座席脇の手すりにくっつけた腰を浮かせかけては、懸命に思いとどまることを繰り返していた。

「——おねえちゃんっ!!」

そんな詩織を、エプロンの端を強く引いて、誰かの叫び声が引き戻す。

「おねえちゃんせんせえっ……ねえっ……!!」

「え、あ、な、なに……?」

「あ、あのね、あのっ」

詩織を呼びとめていたのは、エリと並んで座っていたカスミだった。なにかといえはエリに張り合おうとする少女はいつもの勝ち気な表情を、今はくしゃくしゃに歪

めている。

「あ、の、っ、せんっ、せい、お、ねえちゃんっ……」
震える唇、赤らむ頬、涙すら滲ませて緩む目元。

少女のもう一方の手は、スモッグの上からきつく足の付け根を押さえ込んでいる。もはやそれだけで、カスミの訴えの理由は明瞭だった。

「あ……あたし、も……あたしもおっ……」

「あ……」

ぶるぶると震える小さな手が、ぎゅっと詩織の袖を握り締める。

「うう……おねえちゃん……っ」

「か、カスミちゃんも……オシッコ?」

驚く詩織に、カスミは真っ赤な顔をさらに赤くして、俯くように小さく頷いた。

しかしそんな反応がなくとも、きつくスカートの上から股間を握り締め、ぎゅぎゅっと席の上で腰を擦りつける仕草を見れば、さっきまで同じ事をしていた詩織には一目瞭然だ。すでに限界ギリギリまで我慢しているらしきカスミには、エリ以上に余裕がなさそうだった。

「が、我慢できない?」

無駄とは思いつつも聞いてみる。が、カスミは弱々し

く、小さく首を横に振るだけ。

予想通りの反応に、詩織は慌ててカスミを抱き上げるようにして立ち上がる。

「い、急がなきゃ……！」

驚く弓野先生に視線だけで合図し、そのままカスミを連れて真っ直ぐにバスを降りた。

「っ……」

詩織に抱えられながら、小さく身を丸めたカスミ。握り締めたスモックの下、じゅわ、じゅわ、と禁断の水音が響く。

小さなカスミのスカートにはすでに小さく染みが広がりは始めていた。それが示す少女の『失敗』の証拠、オモラシの匂いのはっきりと詩織の鼻をかすめる。

（ううっ……）

手のひらに触れる濡れた布地の感触。それに同調し、詩織の下半身までもが疼き始める。

きゆうんと下腹部に響く尿意に小さく呻きを飲み込みながら外に出た詩織に、エリの側に付き添っていた新藤先生が何事かと顔を上げた。

「え、なに、どうしたの？」

「あ、あのっ、カスミちゃんも無理だっって言っちゃって

……それで……」

「ああもう、やっぱりね……こうなっちゃうのよねえ。ごめんなさい前原さん、こっちも手が離せないの、あなたが面倒見てあげて？」

「え……っ」

どうやら、エリはほんの少し外に飛び出すのが間に合わず、ちょっとだけ失敗をしてしまったらしかった。

後始末に手を離せないらしき新藤先生に小さな不安を覚える詩織だが、しがみ付いてくるカスミを見、しっかりとしなきゃ、と自分を叱咤する。

「おねえちゃんっ……」

「だ、大丈夫。あとちょっとだけだよっ！」

いつもの強気な様子とはまったく別の、縋り付くような弱々しい声に急かされながら、詩織はカスミを手伝ってあげることに決めた。

停車したバスの陰、少し草の生えた剥き出しのアスファルトには、わずかに砂が積もっている。路肩に停車した車体によって、周囲からの視線ははっきりと遮られていた。

崖を保護する石垣の下、バスで区切られた高速道路の片隅で、もはや我慢の限界のカスミにオシッコをさせる

のだ。

「だめ……でちゃう……うっ」

「ま、待って！ カスミちゃん、まだダメだからね！」

もはや一步も動けないらしきカスミに代わって、詩織は彼女の背後からスカートを引き張り上げ、股間から小さな子供ばんつを脱がせにかかる。

が、湿った布地が白い肌にびったりと張り付いて、思うように動かない。

「えっ……あ、カスミちゃん、だめ！ 待って！」

「あ、あっああっ、でる、でちゃうっ……」

じゅっ、じゅうううじゅじゅうっ、

詩織の制止は届かない。がく、がくと膝を震わせたカスミの足の付け根を、熱い水流が伝い始める。

「わ、わわっ、待って、もうちよっとだけだから！」

下着が引っかかった状況のまま、しゃがみ込もうとしてしまったカスミを押し止め、詩織は強引にその脚の付け根からキャラもの下着を引きずり下ろした。

温かい滴がちよろちよろと噴き出すスカートの中、思いつきの手が汚れしまうが、もはやそんなことは言っていない。

られない。

詩織がどうにか濡れた下着を引き張り下ろすと同時、カスミはその場にしゃがみ込み、ものすごい勢いでオシッコをはじめめる。

「あああはああ……っ」

じゅっぶじゅっ、ぶじゅうううううっ！！

(う、わあ……っ)

抱え込むような姿勢になった詩織の腕の中、剥き出しになったあどけないつくりの排泄孔から、色の薄い水流が猛烈な勢いで噴射された。

カスミのおしっこは、細い足の付け根から大きく前に飛び出す水流となって、石壁の根元を直撃する。

じよじよっ、じよぼおーっ！！

ぶしゆるるるるっ、じゅぼぼぼぼぼーっ！！

その勢いは、まるで真横にした噴水のよう。

見る間に地面には大きな水溜まりが広がり、積もった砂は泡立ちながら表面をかき混ぜられてゆく。

こんな小さな体で、一体どれほど我慢していたのだろう。カスミの人知れぬ苦闘を知らせるかのごとく地面に叩き付けられる薄黄色の奔流は、バスの車体と石垣の隙間の地面に激しく打ち付けられて、激しい水音をあたりに響き渡らせる。

ぶじゅっ、じゅびびっ、ぼじゅじゅびぼぼっ……
ぶじゅじゅじゅうううううーっ！

脱ぎかけのばんつの股布に跳ね、ぴちぴちと跳ねる飛沫が、カスミの湿ったスカートにまで飛んで小さな泥の染みをつくる。

見る間に広がった大きなおしっこの湖は、その場にほかほかと湯気を立ち昇らせるほど。あまりにも熱く激しい排泄に、詩織はそこから目が離せない。

「あ、はあああ……」
堰き止められていたものを一気に解放しながら、カスミは詩織の腕の中で、甘い吐息をこぼし、猛烈な尿意からの解放感に唇を震わせる。

スモックの端を握り締め、目元をとろんと潤ませて。カスミは天上に昇らんばかりの甘美な快楽に身を委ねて

いた。かくんつと上下する小さな腰とともに、噴き出すおしっこの角度が変わり、広がった水面を叩いてはじょぼっじょぼぼぼっ音を響かせた。
(か、カスミちゃん……す……い……こんなに、オシッコ、いっぱい出してるっ……)

急遽用意された、高速道路路肩のバスの物陰。女の子の排泄にはあまりに不向きなその場所を、しかしまさにここが正しいトイレなのだと言わんばかりに。

あまりにも堂々たる、カスミの排泄に魅入られて、詩織はそこから目が離せない。

熱く激しい水流を迸らせ、地面へと叩き付けるカスミの切なげな響きに刺激されるように、詩織の下腹部も激しくざわめいていた。

「んっ……くう……っ」
握り締められた空色のエプロンの下、満水の乙女のダムはこぼり、こぼりとその身を震わせ、少女に排泄を訴える。『おねえちゃん先生』のおなかの中には、今日の前に広がる恥ずかしい水たまりよりも、なお大量のおしっこが溜まっているに違いなかった。

ちよろっ、ちよろろろ……

ぶしゅつ、しゆるしゅしゅつ、ぶしゆるるるるうう……!

「あ……まだ……でるっ……」

いったん収まりかけたかに見えたカスミの放水は、しかし何度が途切れながら断続的に続いた。まだいとけな少女の未成熟な身体では、長時間の我慢を強いられて排泄器官がうまく働いていないのだ。

うっとり、目を閉じて恍惚のなか、カスミの独白が詩織の耳朶を打つ。

カスミの足の付け根から噴き出す水流は、道路の隅に積もった砂を押し流すように、地面の一方に河になって流れだしていた。そのおしっこの大河の行く先を思わず追いかけてしまった詩織は、その視線の先にエリが済ませた痕跡らしき水跡を発見する。

そして、見る間に二人分のオシッコの流れは合流し、ひとつの大きな河になって、アスファルトの上に広がる大きな水たまりへと注ぎ込まれてゆく。

エリとカスミ、二人分のオシッコをたっぷりと吸いこんで黒く染まった地面は、バスの物陰を『おしっこをするための場所』へと変えていた。

車体によって外界から区切られたスペースには、あど

けない少女達のオシッコの匂いが立ちのぼり、詩織にイケナイ誘惑を繰り返した。

(や、やだあっ……)

いまやここは、正しくオシッコをするための場所……トイレと同じだった。

詩織はたまらず目を閉じた。本当なら鼻も耳も塞いで、できることなら今すぐにもここを逃げ出してしまいたい。だが、しゃがみ込んだままぎゅっと袖を握るカスミを振りほどくこともできなかった。

だって、ここは『そのための』場所なのだ。

先を急がねばならない遠足の途中、路肩に停まったバスの陰。誰からも見えないように視線を遮られた区画。

つまり、ここは女の子のおしっこの為に用意された場所であった。どうしてもおしっこが我慢できなかった女の子たちのために用意された、臨時仮設屋外トイレ。

おしっこを、しても、いいところ。

だったら。それなら。

(わ、わたしも……一緒に……っ)

詩織にだって、ここを使う権利はあるはずだ。目の前

で見せつけられたエリのおしっこ、堂々たる排泄の一部始終。

くらくらするほどの光景を前にして、はるか数キロ先のサービスイリアのことなど、詩織の頭からは吹き飛んでいた。

(………したい………わたしも、おしっこしたい………)

耳の奥で反響する放水音に、詩織の膀胱も共鳴するようにざわつきはじめる。文字通りの誘い水がじんじんと恥骨に響いて、詩織はきゅゅっと脚を交差させた。

エリとカスミのおしっこを見せつけられ、詩織の下腹部の水風船はみるみると重みを増してゆく。ずしりとのしかかる大量の水圧が閉ざされた水門を内側から押し開こうとする。

下着の奥、慎ましかに閉ざされていた乙女の花弁が、イケナイ誘惑にひくひくと痙攣を始めてしまう。

(………だ、だつてっ、ずるいよ、カスミちゃんと、エリちゃんだけ………あんなにいっぱい、気持ちよさそうに、オシッコ、させてもらつてっ………！)

切羽詰まった下腹部を解放し、おなかの中を占領していた恥ずかしいオシッコを思う存分に、身体の外に追いつ出すカスミの姿。たったいま行われた排泄が、少女を妖

しく誘惑し、理性をぐらぐらと揺らす。またも筋違いの羨望が、詩織の心を侵食してゆく。

バスが止まることなくちゃんと予定どおり進んでいけば、詩織は本来ならもうとっくにサービスイリアにいて、トイレを済ませられていたかもしれないのだ。

(わ、わたしも、ここでっ………、いっしょ、に………)

ここでいっしょに、おしっこしたい。

それは、詩織にとってあまりにも抗いがたい誘惑。

次の休憩まで我慢できるかもわからないというこの状況で、突如目の前に出現した、臨時仮設トイレ。

そこを使って、いまずぐに乙女の欲望を果たしてしまいたい——そんな衝動に、詩織はきゅゅっと足を閉じ合わせて唇を噛み締める。エプロンの中、震える指がポケットティッシュを握り締める。

(ここで、トイレ、おしっこ………)

アスファルトの上の大きな水たまりに、詩織が吸いこまれそうに身を乗り出しかけた時。

くい、とその袖が引かれる。

「………おねえちゃん？」

いつのまにか、カスミのオシッコが終わっていることにも気付かず、詩織はその小さな手のひらをぎゅっと握り締めていた。

手を塞がれて困惑するカスミは、しゃがんだまま後始末もすることができずに、詩織の様子を窺っている。

「ねえ、おえねちゃん。オシッコ、終わったよ……?」

「え……?」

きょとんと小さな瞳に見つめ返され、詩織はようやく我に返った。

「あ、ご、ごめんね。……全部、出た?」

「うん……」

ぶんぶんと頭を振って脳裏を占める悪辣な空想を振り払い、詩織は取り出したポケットティッシュでカスミの後始末をはじめめる。

本当ならカスミ自身にやらせるべきことだが、カスミは放水のショックでまだぼんやりとしており、詩織が代わりに世話を焼いてやらねばならなかった。

まだぼたぼたと雫をこぼし、時折ぴゅぴゅつ、と水滴を跳ばすカスミのおんなのこは、何度か拭いてもまた汚れてしまう。ガマンし続けたせいで、まだオシッコが全部出きっていないのだろう。

「あ……」

ティッシュがごしにじわりと広がるカスミの熱い雫の感触に、詩織のおなががむず痒く震える。

自分とは違って、したいだけオシッコを済ませ、おなかの中の苦しみを残らず吐き出してすっきりしたであろう小さな排泄孔が、とてつもなく羨ましい。

(カスミちゃん、もう我慢しなくてもいいんだ……)

いいなあ、いいなあと声ならぬ喝采をあげそうになる心を押さえ込み、詩織は手を動かし続ける。

カスミのオシッコはエリのオシッコの跡をすっかり覆い尽くして、いっそう大きな水たまりを残していた。波打ち際の周辺に泡を立て渦を巻くオシッコの痕跡は、カスミがあんな小さな身体でどれだけ我慢していたのかを窺わせる。

詩織は最後の仕上げと、カスミの足に絡まっていた、おチビリで湿ったばんつを脱がせてゆく。バスの中の荷物には、こんな時のための換えのばんつが積んであるのだ。

「ちよつと汚れちゃったね……中で着替えようか、カスミちゃん」

「……おねえちゃん、ひ、……秘密だからね」

すうすうするお股を隠すようにスカートをぐいっと引っ張って、もじもじと俯きながら、カスミは存外に力強い口調で言う。

「秘密なんだからね。あ、あたし……オモラシなんか、してないんだから。こんなところでオシッコしたくなくなったりなんか、しないんだから。……そうでしょ？」

「……………」

「あたし、もうコドモじゃないもん。男子は知らないけど、おんなのこがこんな所でおしっこなんてしないもんっ……ちゃんと、おトイレまで我慢できたの、できたんだからあっ」

早熟なカスミらしい言い訳だった。

けれど、その言葉は今もなお、ここで——バスの物陰の臨時仮設屋外トイレで、オシッコをするというはしたない欲望を捨てきれずにいる詩織には辛すぎるもの。

きゆう、と甘く疼く排泄器官が、詩織に排泄を訴える。

「……そう、だね」

渴いた喉に唾を流し込んで、詩織はカスミを不安にさせないようにはっきりと頷いた。

みんなのお手本となるように、エプロンを着けた一人前の『先生』がするように。

泉会の『おねえちゃん先生』として。カスミの立派なお手本となるように。

ぎゅっと脚の付け根に力を込め。

なお高まる尿意の中、おさまる気配を見せないオシッコを我慢しながら、詩織はバスへと戻っていく。

▼ 3

ぶしゆう、と音を立てて、泉会のみんなを乗せたバスはサービスエリアの駐車場の片隅に停止する。

思わぬ途中停車によって予定からは15分くらい遅れてしまったが、それでも渋滞などに巻き込まれずに移動できたのは僥倖であつたらう。

「はい、それじゃあちよつとだけ休憩します。おトイレに行きたいひとはいるかなー?」

新藤先生が車内に向けて呼びかけると、はいっ、という声と共に、ばらばらと子供たちの手が挙がる。

出発から1時間と少し。小さな子供たちにとつては長い時間である。エリヤカスミがそうだったように、朝、家を出る前にちゃんとトイレを済ましてきた子達でも、そろそろ尿意を催してもおかしくない。それを見越しての休憩であるが――

それは同時に泉会の『おねえちゃん先生』たる詩織にとつては、焦がれるほどに切望し続けた待望の瞬間であ

つた。

(っ……着いたっ、ついたあ……っ！ 到着っ……!! おトイレ、やっとおトイレ行ける……っ、おしっこ、おしっこできるっ……!!)

座席シートの上に身を強張らせ、今にも足を踏み鳴らしてしまいそうになるのを懸命に堪えながら、詩織は硬く張りつめた下腹部をエプロンの上から撫でる。

エリとカスミの為に思わぬタイミングで差し込まれた臨時のトイレ休憩を、切羽詰まった下腹部を握り締めたまま断腸の思いで堪え。

再出発したバスの中、永遠にも思える時間を尿意と戦いながら、ようやくたどりついたサービスエリアでの正式な『おトイレ休憩』である。

これでおしっこできる。ここならおしっこできる。――もう我慢しなくてもいい。

逸る心とともに、先走って緩みそうになる股間の排水孔を、おしりの穴にぐっと力を込めてぎゅっと引き締め、詩織はできるだけ平然を装う。

「それじゃあ、ここでおトイレ休憩です。手を挙げた人もだけど、まだ大丈夫な子もちゃんとおトイレに行くようにしようね。途中で急におトイレ行きなくなったら、

困るでしょ?」

口々に上がる「はーいー!」そんなことないもん!」という子供たちの声。おりこう揃いな泉会云のみんなの中で、詩織だけがその言いつけをちゃんと守れていない。

本当はこのバスの中で真つ先に手を挙げなければいけないのは、出かける前のおトイレも済ませられなかった詩織なのに。

「……………」

羞恥ととともに、腰上に重苦しくずしんとのかかる下腹部の膨らみ。切迫した尿意の波にきゆうんきゆうんと切ない疼きを繰り返す股間に、詩織は赤くなつてぎゅつと閉じ合わせた足をモジモジと擦り合わせる。

「じゃあその子たちは『先生』についてきてね? 他の子はきちんとお留守番できるかな?」

「はーいっ!!」

元気の良い返事がいくつも重なる。新藤先生はよしよしと頷いて、バスの後ろの詩織たちに小さく頷き、子供たちを連れてバスを降りていった。

(と、トイレっ……急がなきゃっ……!)

乗降によってざわざわと騒がしくなつた車内を気にしながら、詩織もそそくさと席を立つ。急な動作によって

万一にも『おチビリ』なんてしてしまわないように最大限の注意をしながら。

ずっとガマンし続けたおしっこを済ませるため、待望のトイレまで猛ダツシユ。個室に飛び込んで白い便器をまたぎ、下腹部をばんばんに張りつめさせた乙女の熱水を思いつきり噴出させる――

待ち焦がれたサーピスエリアに到着し、あとはトイレに駆け込んでゆくだけ、という状況にあつて、詩織はすっかり自制をなくしていた。

――けれど。

「あ、ちょっと、前原さん?」

「え、は、はいっ!?!」

バスのタラップを降りようとしたところで、詩織は弓野先生に呼びとめられる。

「どこに行くの? あなたもよ。早くみんなを案内してあげてね」

そう、泉会の『先生』たる詩織にはそんな勝手は許されないのである。

「え。……あつ」

咎めるような弓野先生の視線に、詩織は慌てて身体の前で握り締めてしまつていたエプロンを離す。

が、もう遅かった。座席の上で無意識に握り締められ、くしゃくしゃに皺の寄せられた水色のエプロン。

無残な姿となった『先生』の証に加え、その場にじつと立つこともできず、バスの座席を握り締めてひっきりなしに足踏みを繰り返し、腰を揺する詩織の様子は、どう見ても『おしっこ我慢』の真っ最中。

案の定、閉じ合わせた足をそわそわ擦り合わせ続ける詩織に、弓野先生はすぐに詩織の状況を察していた。

「なあに？ ……ひよっとしてお手洗いなのか？」

「っ……」

これまで、なんとか尿意を悟られまいとしていた詩織にとつて、それはとても明け透けな質問だった。

泉会の『先生』の一員として。みんなのお手本になるべき『おねえちゃん』として。決して気づかれてはならないことだったのである。

はつきりとトイレを我慢しているのを知られたことに、詩織は耳まで赤くなってしまふ。

（っ……やだ……やだあっ……ちや、ちゃんとしなきゃ、だめなのに、だめ、なのに……っ）

それでも、もう詩織に意地を張る余裕は残されていない。皺の寄せられたエプロンを押さえ、じたばたと

足踏みを繰り返してしまふのを止められない。

もじもじ、くねくね、恥ずかしいのにどうしてもやめられない、オシッコ我慢のダンス。

素直に尿意を認めるよりも、ずっとずっとみっともなく、恥ずかしいオシッコの肯定。『はい』という素直な返事よりも遙かにはつきりと大胆に明瞭に、トイレを我慢していることを主張しているのに等しい。

返事の代わり、再度きゅっと握り締められるエプロンの端に、弓野先生は小さくため息をついて、

「そうなんだ。……じゃあさっきも辛かったのね。ごめんなさいね、気付いてあげられなくて」

「は、はいっ」

さっき、というのはバスを路肩に駐車しエリ達にオシッコをさせていた時の事だ。反射的に答えてしまつてから、詩織はこみ上げてくる羞恥にますます顔を赤くした。

なにしろ今の返事は、『おねえちゃん先生』たる詩織がエリやカスミ達と一緒に、あの時のバスの陰で一緒におしっこをしたかったのだと認めるのに等しいのである。

「じゃ、じゃなくてっ、その、っ」

（っ……ち、ちがうの、違うんですっ、朝、どうしても、トイレに入れなかっただけでっ……）

反論の言葉は、しかし少女の喉の奥にとどまるばかり。詩織は尿意の波にぎゅうっと身体を縮こまらせた。弓野先生も忙しいのに、迷惑をかけてしまうという申し訳なさにもますます詩織の胸は重くなる。

「いいわよ。ほら、もうこっちはいいから、早く行ってきてね。大丈夫？」

「……あ、あのっ、……」

全然、だいたいようぶじゃない。

限界寸前の少女を励ます優しい声。けれどそれもまた、詩織の惨めさをさらに強めるものであった。羞恥と惨めさに心押し潰されてしまいそうになりながら、自分の都合を優先するように許してくれた弓野先生に詩織は精一杯の領きを返す。

（ごめんなさいっ、ごめんなさい……っ！）

心の中で何度も何度も謝りながら。

「ほら、早く済ませてらっしゃい」

「は、はいっ……」

送り出してくれる弓野先生に答え、震える足に活を入れて、詩織は手摺りを掴み、よたよたとバスのタラップを降りてゆく。ほんの数段の段差だが、今の詩織には油断できない難所だ。本当は走り出したいくらいだったが、

ちよっとでも気を抜くとぎゅっと締め付け続けている括約筋が緩んでしまいそうになる。

不安定な足場では、一步を踏むごとに震動が下腹にまで伝播し、じいんと鈍い痺れとなって少女の背筋をざわめかせる。

下着を汚さないように、一段ずつ慎重にタラップを降りきった詩織は、そのままできるだけの早足でサービスエリアのトイレを目指した。

（やっとな、やっとなトイレ……オシッコできるっ……）

待ち焦がれていた、待望のトイレ。

オシッコのできる場所。オシッコしてもいい場所。

おなかの中に大きく膨らみ、たぶんだぶんと揺れる羞恥の水風船。ぱんぱんに膨らむおなかの中身を、おしっこを解放できる瞬間を思い描き、詩織は『はあうっ』と切ない吐息をこぼした。

……だが。

詩織は休日の高速道路のサービスエリアという立地をまだまだ理解していなかった。

我慢を重ね、ようやく辿り着いた婦人用トイレの前で

詩織を待ち受けていたのは、その入り口から伸びた長蛇の列だったのだ。

「う、嘘……っ」

知らず、詩織の膝がきゅっとくっつき合う。二十人、三十人では足りないだろう。売店の前を通り過ぎ、さらに照明の下を折れ曲がるようにしてずらりと並ぶ女性たちの列は、隣の紳士用トイレに比べても桁外れに長い。

トイレの中に続いている列は、まるでそこが人気の映画のチケット売り場であるかのような錯覚すら抱かせる。それはある意味正しかった。行楽のシーズンに大勢の人が集まる高速道路のサービスイリアで、一番の人気スポットはトイレなのである。

（そんなっ……うそっ……と、トイレ、すぐそこにあるのに、ま、まだ、我慢しなきゃだめなのっ……!?!）

すぐそこに、手の届きそうなところにトイレがある。だから、もう我慢しなくてもいい、すぐにオシッコできる——そう思いこんでいた詩織にとって、目の前の現実はとても受け容れがたいものだった。

「はあ……んっ」

きゅっつと締め付けられる下腹部に、尿意の波が押し寄せる。

（と……トイレ、おトイレ……っ、オシッコ、こんなにしたいのに……っ、ま、まだ、我慢しなきゃ、だめなの……っ!?!）

目の前の光景にふらふらと街灯に寄り掛かる詩織の目の前で、次々と女の人たちが列に並んでゆく。驚くべきことに、トイレからすっきりした顔をして出ていく人たちよりも、新しく列に並ぶ人の数の方が多いのだ。

渋滞の高速、出口のない混雑の中で、思うことは皆同じ。遅れた予定の分だけ、誰も強まる生理的欲求に苦しみ、その解放場所としてこのサービスイリアに集まっているのだ。

まるで西部時代のゴールドラッシュ。駐車場に続々とやってくる車から、多くの人々が一斉にトイレを目指していた。

見る間に伸びてゆく順番待ちの列が、遠いゴールをさらに遠くしてゆく。

「は……はやく、並ばなきゃ……っ!」

ここで眺めていても、いつまで経ってもオシッコはできないと、慌てて列の最後尾につく。しかし詩織がもたもたしている間に、列ははじめに見たときよりも10人ほど長くなってしまった。

急いで並んでいけば詩織はあと10人分、早くトイレに辿り着けていたはず。そう思うと尿意はさらに激しくなってくる。

(ふうう……つ……だ、だいじょうぶ、あとすこし、……あと、もうちよつと、だけ……がまん……)

まさかの油断で我慢の延長戦に入った順番待ち列の中、詩織は泉会のエプロンの裾を握り、忙しく足踏みを繰り返す。

スカートの下、寄せ合わされた膝は内股気味の不安定、おしりはもじもじと左右に揺すられ、腰はクネクネと動き続ける。

さりげなく伸ばされた手のひらは、躊躇いの中エプロンの前を押さえ、空色の生地に皺を寄せる。誰が見てもはつきりとオシッコを我慢しているのだと解るだろう。

もっとも、こうして落ち着きなく、大行列のトイレに並んでいる時点でそんなことは明白なのだ。

「……ふう……つ」

ちらりと見上げた先の時計は、あつという間に5分も進んでいた。休憩時間は残り15分。それだけが過ぎたら、詩織はバスに戻って出発しなければならぬ。

たとえ、トイレに入れなかったとしても、だ。

じりじりと進む時計の針に煽られ、焦る詩織とは裏腹に、順番待ちの列は遅々として進まない。

(はやく……はやくしてよお……つ)

はあ、はあと荒い息を繰り返す少女の肩が大きく上下する。詩織は何度も背伸びをして列の向こうを窺うが、曲がりくねったピンク色のタイルの入り口は、不機嫌そうな順番待ちの奥様方に塞がれたままだ。

「……………つ」

(どうしよう……時間、なくなっちゃう……)

バスの出発時間は、事前に先生たちから何度も念を押されていた。ただでさえ渋滞で予定が遅れている以上、これ以上遅くなるわけにはいかないのだ。

訳を説明して入れてもらおうかとも思う詩織だが、詩織の前に並ぶおばさんたちはイライラと足を踏み鳴らしていて、とても気軽に声を掛けられる雰囲気ではない。

(んっ……はやく……はやく……つ)

ぎゅつと口を引き結び、小刻みに足踏みを続ける詩織。そんな泉会の『おねえちゃん先生』とは対象的に、すっきりした顔の女の子のグループが、詩織の傍を通りかかった。

たった今、トイレから出てきたばかりの——ちょうど

詩織と同年代の少女達だ。楽しそうにおしゃべりしながら詩織の隣を通り過ぎてゆく彼女たちが、詩織は羨ましくてたまらない。

(はやく、わたしも、あの子たちみたいにっ……！)

一刻も早くおしっこを済ませて、すっきりしたい。はやくトイレに駆け込んで、思う存分おしっこをしたい。——けれど、詩織にその順番が回ってくるには、いったいあと何人の順番を待たばいいのだろう。

女の子のマークの薄いピンク色をした入り口めがけ、並ぶ人混みを掻き分け、順番待ちの列を押しつけて駆け込みたくなるのを堪えながら、詩織はこみ上げる排泄衝動を堪え、きゅっと唇を噛んだ。



時計の長針が、じわじわと文字盤の上を動いてゆく。

少女にとっては、まるで永遠にも思える待ち時間。

さらに10分ほどが過ぎて、詩織の前の列はやっとなくなりかけていた。すでに少女の姿はトイレの入り口をくぐり、建物の中にある。

ピンク色のタイルが張られたトイレには、十個以上の

個室があり、フォークのように列を作る先頭の女性たちを順番に迎え入れていた。イライラの頂点に達する直前で個室に迎え入れられ、詩織の前のおばさん集団も次々とトイレに入ってゆく。

目の前の、自分ではない女の人がオシッコを済ませ、すっきりとした顔をして出てゆく姿を飽きるほど繰り返し見せつけられながら、空色のエプロンの下、詩織の下部は激しい尿意を懸命に押さえ込んでいた。

(もうすぐ、もうすぐっ、オシッコできる、オシッコさせる、おトイレで、出せるっ……！)

焦らされるかのような我慢の連続に、さらに高まった尿意は執拗に少女の股間を責め苛む。必死に閉じ合わせた水門の出口もじんじんと痺れ、いつ押し破られてしまってもおかしくないほどだ。

出ちゃう。トイレ、おしっこ、でちゃう。

目の前でオシッコの瞬間を何度も「おあずけ」され続け、一瞬でも気を抜けばたちまち緩んでしまいそうになるオシッコの出口を、ありったけの力で押さえ込み。両手の応援だけでは足りず、ぎゅっと交差させた脚が何度組み変えられる。

だがそれももうすぐ終わりだ。あとほんの何人かが個

室から出てくるまで我慢すれば、次は詩織の番になる。ようやくトイレに入れる。朝からずっと苦しめられていたこの尿意を解放できるのだ。

「ん、う、はああ……っ」

その瞬間を思い描き、詩織は切なげに腰を揺する。

高い壁とドアに区切られた。清潔で誰の目も届かない秘密の個室。その中で服を脱ぎ下着を降ろし、白く清潔な陶器をまたいで、足元めがけ猛烈に恥ずかしい熱湯を噴出させる——その瞬間を。

（あっ、あとっ、あとひとり……！ 次、わたしの番……オシッコ、オシッコできるっ……やっとおしっこできらう……っ！）

そして。さらにひとつ、個室のドアが開き。詩織の前の女性が空いた個室の中へ歩き出した、その時だった。

「ああ、ごめんなさい、すいませんねえ……」

婦人用トイレの入り口の辺りでちよっとした騒ぎが起こる。その中心にあるのは、聞き覚えのある声だった。

「すみません……本当にすみませんねえ……」

数名の子供たちを連れて入ってきたのは、泉会の赤坂先生だった。少し白髪之交じった髪をなで、笑顔をさらに緩めて、赤坂先生は詩織を見つ、ああ、と安堵の吐

息をこぼす。

その笑顔は、申し訳ないけれど詩織にはとてつもなく不吉なものに見えてしまった。これまで詩織をもてあそび苦しめた、理不尽が形を取って現れたかのよう。そんな錯覚。

そして、不幸にもその予感的中してしまう。

「ああ、前原さん、ちようど良かったわあ。ごめんなさいねえ、場所取りさせちゃったみたいで。ちよっと手伝ってくれるかしら？」

「え……っ」

「バスに残ってた子達なんだけど、さっき急にお手洗に行きたいって言いだしてねえ……」

「っ、せんせいっ、オシッコおっ」

「でちゃう、おしっこ出ちゃうよおっ！」

赤坂先生のすぐ後ろには、何人かの子供たちが連れられていた。手を上げて口々に尿意を知らせ、脚をモジっかせているその様子は、傍目にももう、限界であることが見て取れる。

「ごめんなえ前原さん、この子たちを先に入れてあげてねえ」

「え、えっ、せ、先生っ……」

トイレ。詩織がずっと並んで待っていた、待望の順番。そこに割り込ませてくれ、と赤坂先生は言っているのだ。

(そ、そんなっ、わたし、わたしい……っ)

次は私の番なんです！ 次は私がおしっこする順番なんです！ —— そう言いかけた詩織を遮り、子供たちをなだめるように、赤坂先生は声を和らげる。

「ああ、はいはい、大丈夫よ。いまお手洗いに入れますからね。……前原さん、申し訳ないけど手伝ってくれる？ 表で男の子たちが待ってるのよ。お願いして、紳士用のほうに入れてもらって頂戴な」

「え……ええええっ!?!」

思わず頓狂な声を上げてしまった詩織に、周囲の視線が集中する。

—— 紳士用のトイレに。男の子と一緒に。

想像だにしていなかったお願いだった。

もちろん、泉会で『先生』をしていれば、詩織だって男の子たちに付き添って、『おとこのこ用』トイレに入る事はある。

しかし、今は事情が違いすぎる。切羽詰まった下腹部

を抱えて、その上男の人達に交じって、違う方のトイレにだなんて——。人一倍羞恥心の強い思春期の少女の感情を無視した、あまりにも酷な頼みだった。

赤坂先生はもう随分な年のせい、詩織のような女の子であってもまだほんの子供で、泉会の子供たちとおんなじようなものだと考えている節があった。

だから、男の子のトイレに付き添うくらいなんでもないと、そう言っているのだ。しかしそんなこと言われても、詩織にはたまったものではない。

注目を浴びたせいで詩織の交感神経が活性化し、下腹部にも熱い雫の疼きが激しくなる。羞恥と共に増す尿意を堪えながら、詩織はたまらず赤坂先生に駆け寄った。

「あ、あの、……待って、くださいっ……わたしっ」

「せんせい、オシッコでちゃうっ……!!」

「ああ、ごめんなさいねえ、大丈夫よ、すぐに入れてもらうからねえ」

「待って、赤坂先生っ……違うんです、わたしっ……」

「せんせい、もうだめ、でちゃう！ オモラシヤだあっ、

おトイレ、おトイレえっ!!」

「ねえ、はやくうっ……!!」

赤坂先生に対し、自分の窮状を必死な説明しよう

とする詩織。だが、切なる訴えは口々に尿意を叫ぶ女の子達の声で遮られ、赤坂先生の耳までは届かない。

オシッコは、トイレは。詩織だつてずっとずっと我慢していて。ようやくその順番がここで回ってきて。

今まさにその瞬間なのに。次はやっと、やっと詩織がトイレに入れる番なのに。この中で誰よりも負けないくらい、詩織だつてオシッコがしたいのに。

「せ、先生っ!」

(わ、わたしも、オシッコしたいのっ!! もう、我慢できないのっ……!!)

懇願の後半は、言葉にならなかった。切なる訴えを押し止めたのは、詩織の身を包む、空色のエプロン。

泉会の『先生』の証。

「あ、赤坂先生っ……あのっ……!!」

「それじゃあお願いね、前原さん」

詩織の抗議はオシッコを訴える子供たちによって阻まれてしまい、赤坂先生は我慢の限界を叫ぶ子供たちを連れ、詩織の前のおばさんたちに頭を下げ、説明をはじめていた。

(わ、わたしだつて、オシッコ……っ……)

同じように子供に扱うのならば。せめて、一緒に、連

れてって欲しいのに。伸ばした指先が空しく空を搔く。

突然の順番割り込みの申し出に不機嫌さを隠そうともしない、順番待ちのおばさんたち。だが、流石にいまにもお漏らしをしまいそうな様子でおしっこ我慢のダンスをしている子供たちを無視するわけにもいかないらしく、渋々と順番を譲る。

「……すみませんね……」

「わかったわよ。早くしてよね……まったく。

今度からちゃんと並ばせなさいよね、もう」

文句を言いながらも不承不承で割り込みを了承し、おばさんたちは列を詰める。

そして赤坂先生は、連れてきた子供達と一緒に空いた個室へと入ってゆき——そのまま、ドアが閉まった。

がちやり、無慈悲な施錠の音。

「え……っ」

そして——気づけばそこには隙間なくびっちり並んだ順番待ちの列が出来上がっていた。

いつの間にか、列からはじき出されてしまった詩織がもう一度列に戻るスペースは、残されていない。

(え、っ、えええっ……!?)

ぞくり、と詩織の背筋を冷たいものが走る。

詩織の順番は、いつの間にか飛ばされて。泉会の『おねえちゃん先生』は、10分以上、じっと我慢して並び続けた順番待ちの列を、いつのまにか追い出されてしまっていた。

(な、なんで……なんでっ!!)

詩織の顔がみるみる青ざめてゆく。だって、詩織はこれまでずっと、列の中でトイレの順番待ちをしていて。長い列がようやく過ぎて、やっと次は、詩織の番だったのに。やっとトイレに入れるはずだったのに。

おしっこ、できるはずだったのに。

「あ……そ、そんな、あ……」

赤坂先生たちの割り込みはいいとして——決して良くはないけれど、最大限譲歩してもいいとしても。これはあまりにも、話が違ふ。違いすぎる。

(んんうあああっ!!)

途端、まるで津波のように込み上げてきた尿意に、詩織は「ぐいっ」と腰をよじる。入れていたはずのトイレが目の前から猛スピードで遠のいてゆくことが、少女の排泄欲求を加速度的に高まらせていた。

そうこうしている間にも個室の一つから水音が聞こえ、用を済ませた女の人がドアを開けた。列の先頭に並ぶお

ばさんが早足でそこに入ろうとする。

しかし、そこは本来詩織のいた場所だ。

「ま、待ってえ……っ!!」

詩織は慌てて列に駆け寄ろうとしたが、しかし返ってきたのはより一層不機嫌になったおばさんたちの視線だった。渴いた喉にくくっと口の中にたまった生唾を飲み込んで、詩織は辛うじて先頭のおばさんに声を掛ける。

「あ、あの……」

「何よ、あんた」

返ってきたのはすさまじいまでもの不機嫌な声。どしんと横幅たつぷりのおばさんに行く手を阻まれ、アイシヤドウをべったり付けた視線にギロリと睨まれて、詩織は声を掠れさせてしまふ。

「え、ええとっ、わ、わたしの……番、次で」

「なあにあんた、横入りする気!!」

「え、ち、違いますっ、……だってわたし、さっきまでそこに——」

おばさんの足元を指差して言おうとした詩織だったが、そこに思わぬほうから声が飛ぶ。

「ちよっと、やめなさいよね。順番よ? ちゃんと並んでよ」

「そうよ。みんな我慢してるんだから!!」

「え、あ、あの……っ」

次々に上がる抗議の声は、列に並ぶおばさんグループからのものだった。長い間を待たされ、さらに赤坂先生の連れた子供たちに順番を越されたせいでおばさんたちの不満は頂点に達してしまっただけだ。

「ああいやだ。いやだわあ! なによ、横入りしてきてずうずうしいわね。黙ってれば分からないって思ったんじゃない? これだから最近の若い子は」

「そうよ、いい加減なこと言わないで頂戴。あたしたちはちゃんと並んでたんだから」

おばさんたちはもう一人たりとて順番を抜かされることに我慢がならない様子だった。別に知り合いという様子でもないのに見事な連携を見せて、詩織が列に戻ろうとするのを阻止してしまう。

全くの理不尽な言いがかりだが、圧倒的な迫力に押しされて詩織はそれに言い返すことができない。

「そんな……あうっ……!!」

おなかの中でおしっこが暴れだし、詩織を襲う尿意は次第に切羽詰まってくる。俯いて前を押さえた詩織を突き飛ばすように、先頭のおばさんは個室に入ってしまった

た。

「あ、ああっ……」

切なげに身をよじる詩織に、さらにおばさんたちの攻撃は続く。

「ねえ、邪魔よ。使わないんならどいて」

「並ぶんならちゃんと一番最後にしなさいよね」

「そ、そんな……わたし、も……もうっ、ガマンできない……」

おしりをもじつかせながら、詩織はそれでも食い下がろうとした。だって本来、次は詩織の順番で、すぐにトイレに入れていたはずなのだ。目の前におしっこをしてもいい場所があるのだ。

詩織の股間はすでに限界を訴え始めていて、これ以上焦らされてしまえば本当に危険な事態を迎えてしまうと告げている。

だが、そんな最後の勇氣も、おばさんたちの言葉によって無残に砕かれてしまう。

「何言ってるのよ、さっきあんた用事言われてたじゃない、お外に他の子が待ってるんでしょ!?!」

「そうよ。早く行ってあげなきゃダメじゃないの。可哀想じゃない。あなたも『先生』なんでしょ?」

(やだ……そんなの無茶苦茶じゃないっ……!!) わ、わ

たしだつて、おトイレしたいのに、オシッコしたいのに
っ……、い、いじわるしないでよおっ!!)

「お、『おねえちゃん先生』だつて……おトイレ、行くの
にっ……」

売り言葉に買い言葉——と言うには、ささやかな反抗
ではあつたが。ほとんど反射的に、文句を口に出しかけ
てしまった瞬間。

詩織の脳裏を、新藤先生の言葉がよぎる。

『他の人達から見ればあなただつて泉会の『先生』と同
じように見えるかもしれない。そんな時に好き勝手なこ
とをしていればどうなるか、わかりますよね』

こんなにも切羽詰まっているのに、オシッコがしたく
てたまらないのに。

『先生』、という言葉と。

きゅつと締められた空色のエプロンが、詩織のワガマ
マを許さない。みんなのお手本になり、困ったことがあ
ればそれを助ける、立派な一人前の『おねえちゃん先生』
であるために。

目の前の理不尽に対する憤りを、抑え込み。震える指

先で、ぎゅうつとエプロンを掴む。

「ご……ごめん、なさい……っ。……すみません、でし
た……」

詩織が俯きながらどうにかそれだけを口にする、お
ねえちゃんはふんと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

それで、全てが終わってしまった。

「……………っ」

長い順番待ちを追い出され、詩織は重い足を引きずつ
てトイレの出口に向かう。望んでいるのとは逆の、オシ
ッコを済ませる場所から遠ざかる向きに。

猛烈に引かれる後ろ髪を振りきって、膝をくつつけ合
わせながら危なっかしく歩いて外に出た詩織を迎えたの
は、同じくモジモジと足を寄せ合う子供たちだった。

「あーっ、おねえちゃん来た、きたよっ」

「おねえちゃん、ボク早くオシッコっ」

「オレもーっ。もう出ちゃうよーっ!!」

三人の男の子がぱたぱたと詩織に走りよって、ぎゅつ
と服の袖を握る。

(あ、あ、やだ……っ、だめ……)

子供らしく取り繕うともしない、明け透けな尿意、ト
イレの要求。彼等の仕草が呼び水になって、詩織の下腹

部は大きくざわつき始める。

左右の手を子供達に引っ張られ、前を押さえることもできなくなり、下腹部がきゅんと悲鳴を上げた。詩織は括約筋にありつたけの力を込めて下腹部の水門を締め付け、震える顎をきゅっと噛み締めて我慢する。

「おねえちゃん？ トイレ、いこ？」

「え、あ、ああ、うん……」

(……ど、どうしよう……)

内心の困惑も言葉にはできない。詩織は子供たちに引きずられるようにして、ずりずりと紳士用トイレの入り口に向かっていた。こちらは婦人用の混雑具合とは対照的に、数名の列が入り口の奥にあるだけの状態だ。空いているとは言えないが、入り口から何十人も順番待ちが続くのには比べれば天と地の差である。

そこは、サーブスエリアのもう一つのトイレ。詩織が切望しているおしっこのできる場所。

——けれど、そこは男の子専用だ。

詩織がオシッコをしていい場所では、ない。

壁にずらり並んだ白い陶器の設備——小用便器は、おんなのこがオシッコをするようには作られていないのだ。(と、トイレ、おトイレ、したいっ、オシッコ……)

詩織の頭の中身の八割は、込み上げてくるオシッコによる『オモラシ』の危険信号と、どうやってオシッコを我慢するかで占められていた。

そんな中、手を引く男の子達の声に詩織は引きずられ、紳士用トイレの中に踏み入れる。

少ないとは言っても紳士用トイレの中には順番を待つ列があった。子供たちはもうすっかり限界で、きちんと並ばせるのは難しそうだ。

詩織の頭の中は羞恥に沸騰し、少女の頬は赤く染まる。(む、無理……だよ……こんなので、お、男の人に……) 順番譲ってくださいなんて、言えないよう……！！) 猛烈な大きな波こそ、一旦は収まっているが、詩織の下腹部は今もお強い尿意に支配されている。足を動かさないようにするのだけでも一苦労だ。もしここに自分ひとりだけなら、下着をぐいぐい引っ張って前を押さえていなければ我慢できないかもしれないレベルだった。

そんな状態で、詩織は見ず知らずの男性にトイレの順番待ちを変わってもらわなければならない。エプロンの前を押さえ、腰を揺すり、脚をもじもじさせながら、そんな事を申し出ればどうなるか。

(わ、わたしが……男の人のおトイレでオシッコするん

だって……思われちゃうっ……」

いや。まず間違いない、その誤解は避けられそうになかった。

——けれど。

「おねえちゃんっ……ね、ねえ、ボク、もうガマンできないっ……」

「あ、ああ……ごめん、ね……っ」

小さな手を不安げに引つ張る子供たちに、詩織は赤くなつた頬を押さえ、荒くなつた息を無理矢理飲み込もうとする。

（っ、だ、大丈夫……ちゃんと落ち着いて、はっきり言えば……わたし、『先生』なんだから……っ）

無邪気に信頼を寄せてくる子供たちを失望させまいという『おねえちゃん先生』を演じるための、健気な決意と共に。

「す、すみませんっ……」

詩織は、ぎゅっと目を閉じて列の一番後ろの男性に声を掛けた。

大滝あさがお園のしおりせんせい

▼
1

「ねーねーおねえちゃんせんせい、はやく、はやくっ!!」

「ちがうよ、しおりせんせい、こっちが先ー!」

「ちよ、ちよと待ってては……!」

「ねー! こっちー! はやくては! みんなさつきから待ってるんだぞ!」

「だめ! 今日ね、しおり先生はわたしたちと遊ぶの! つれてっちやダメなの!」

「ちげーよこっちが先だし! おねえちゃん先生、あっち行っちゃダメだからな!」

「あー、ずるっこだ! いけないんだよ! 勝手にそんなこと言って、しおり先生困ってるじゃない! ひとりじめしちやいけないんだよ!」

「うるせー! おまえらはあっちいけよー!」

「あんたたちこそ、そっちいきなさいよ!」

「わ、わ、待ってみんな、そんなに引っ張ったら……っ」

「こっちだよ!」

「ちげー! こっちだったの!」

「わ、わわっ、——きゃああああ!!」

「うわあっ!!」

「きゃあ!!」

——べしゃん。



「……災難だったわねえ」

「あ、あはは……みんな、元氣いいですから」

「ごめんなさいねえ詩織ちゃん。こんな毎日付き合わせちゃって」

「そんな、気を使わないでください。わたしがお願いし

たことですから」

椅子の上でびしょ濡れの髪を拭きながら、少女——原詩織は笑顔を浮かべて答えた。

大滝あさがお園の庭では今日も子供達が元気いっぱいに遊んでいる。洗面所まで聞こえる子供達の声に、園長先生は頬に手を当てて少しだけ苦笑い。

「みんな、本当にあなたのことが大好きなのねえ」

「あ、あははは……」

詩織は、未来の保育士さんを目指して目下勉強中である。今年の春に進学したばかりの彼女は、叔母の経営する私立のこのあさがお園で『先生』の見習いをしていた。

毎日学校が終わると、まっすぐにここに顔を出し、他の先生達に交じって子供達のお世話をする。

もちろん、まだ学生の詩織が正式に働くことはできないので、他の先生達の指導のもと、あくまでお手伝いという形だ。苦しいことも、辛いこともたくさんあったけれど、めげずに毎日一生懸命頑張った。

詩織はどうしても、夢を諦めきれなかったのだ。

そんな詩織の頑張りが通じたのだろう、あさがお園の子供達はすっかり詩織になつき、他の先生達よりもちよっとだけ年下のお姉ちゃんを『しおり先生』と読んで慕

っていた。

元気いっぱいの子供達は、お姉ちゃんである『しおり先生』を取り合うように、毎日あちこちへ遊びに引張ってゆく。

きちんとした設備のあるあさがお園での仕事は初めてのことばかりで、最初は戸惑い、他の先生達に迷惑をかけてばかりだったが、三ヶ月が過ぎていまではすっかり溶け込んでいた。

「でも、平気？ 風邪ひかないようにね」

「あはは……はい、気をつけます」

大滝あさがお園のモットーは、毎日よく遊び、元気に過ごすこと。

ようやく慣れてきたとは言え、元気いっぱいの子供たちのパワフルさに、詩織は舌を巻くばかりだった。

今日もまた、大人気の『しおり先生』は子供達にこっちで遊ぼう違うこっちだよと取り合いっこにされ、大勢に左右から引つ張り回されてしまった。危ないよとやめさせようとしたりとこころでつい足を滑らせ、庭の隅にあった水たまりの上に転んでしまったのだった。

（みんなが転ばなかったのは、良かったけど……）

馴染まない着替えに袖を通しながら、詩織はそっと溜

め息を吐く。

防寒・汚れ対策として身につけていたジャージはおろか、下着まで泥水でびしょ濡れ。着ていたものはすっかり壊滅状態だ。どうにか頭だけはシャワーを浴びて泥を流したが、服はこのままクリーニング行きで決定だった。

「……………」

汚れた服、濡れた下着。冷たく肌に張り付く布地の感触が、詩織の表情に一瞬だけ暗い影を落とす。

(……大丈夫、もう、平気だもん)

蘇りかけたかたつて悪夢を振り払うように、詩織は強くかぶりを振った。もう、あんなことは起こさない。そのために一生懸命、頑張ってきたのだ。

だから、大丈夫。

「詩織ちゃん?」

「あ、はいっ」

ふと物思いに沈んでいた詩織は、園長先生の声で現実的に引き戻される。濡れたジャージの裾をつまんでいた指を放し、慌てて顔を上げた。

「今日なんだけど、どれくらいまで大丈夫そう?」

「えっと……8時くらいまでなら平気です。門限も延ばしてもらいましたし」

「そんな、無理しなくていいのよ? いつもお世話になってるのに」

「大丈夫ですよ。好きでやっていることですし、それに、たくさん勉強になりますから」

昨今の少子化問題などもあり、園の経営もいろいろ大変らしい。詩織はいまや貴重な戦力として、大滝あさがお園になくてはならない存在である。

園長である叔母はいろいろと気を揉んでくれているものの、詩織は自分が無理に頼んだことだからと、支援の大半を断っていた。

と。

「せんせえ、まだ?」

「しおり先生、はやくー!」

教室の方が騒がしくなる。奥に引っ込んでいつまでもやってこない『しおり先生』に痺れを切らし、子供達が呼びに来たのだ。

「……あら、またお呼ばれね。人気者は大変ねえ」

「あはは……」

湿った髪をタオルで拭い、詩織は腰を上げた。あまり待たせていると、それこそ子供達が続々とここまで押しかけて来かねない。

「そうそう、詩織ちゃん、あたしこのあとちょっと外す
 んだけど、しばらく頼んでいいかしら?」

「え? 園長先生もおでかけなんですか?」

「あら。ひよっとして大崎先生なの? 困ったわねえ」
 今日の担当は、園長先生、大崎先生、鈴森先生、詩織
 の4人。鈴森先生が急な予定でお休みになり、3人で子
 供達の相手をする事になったのだが――

30分ほど前に大崎先生あてに電話がかかってきたこ
 と、急な用事で外出しなければならなくなったのでお願
 い、と伝言を頼まれたことを説明すると、園長先生はむ
 う、と眉を寄せて考え込んでしまふ。

どうやらこちらも、相当に大切な要件のようだった。

「そうなの……。どうしようかしら……」

「……あの、もしお急ぎのご用事でしたら、行ってきて
 ください。ちょっとくらいならわたし一人でも平気です
 から」

「ええ……? でも、流石に悪いわよ、詩織ちゃんに任
 せつきりなんて」

「そんな、遠慮なんかしないでください。私にできるこ
 となら、やらせてもらいたいです」

そうやって切り出した詩織に、園長先生はしばらくた

めらった後、申し訳なさそうに答えた。

「……ごめんなさいね……。本当に悪いんだけど、詩
 織ちゃんにお願いしてもいい? すぐに戻ってくるわ」

「はい、任せてください!!」

ぐっと胸を張り、詩織は答える。それを見て園長先生
 はふっと表情を緩め、席を立った。

「あなたも、もう立派にこのあさがお園の『先生』なの
 ねえ。うふふ、なんだかとても頼もしいわ」

「あ……」

園長先生の言葉に、詩織の胸がそっと高鳴る。褒めて
 もらえる、頼ってもらえる。それは詩織にとって何より
 も嬉しいことだ。

ちゃんと、一人の――『先生』として。その信頼を得
 るため、失ってしまったものを取り戻すため、詩織は懸
 命に頑張ってきた。

「あ……ご、ごめんなさい! ちょっと言いすぎました。
 まだまだ半人前なのに」

「いいのよ。そんなに謙遜しないで。あなたのおかげで
 本当に助かっているわ。みんなもあなたのことを慕って
 きているしね。……じゃあ、お願いしてもいいかしら」

「――はい!!」

しっかりと、笑顔を浮かべて頷いて。

詩織は部屋を出てゆく園長先生を見送り、そっと椅子から立ち上がる。

「さあ、早くしなきゃ……みんな待ってるしね」

いつまでも大崎先生ひとりだけに任せておくわけにはいかない。詩織は急ぎ足で更衣室へと向かい、自分のロッカーを開ける。

あさがお園での日々は思わぬ汚れとの戦いだ。元気がっぱいの子供達はまるで怪獣。付き合っていると、一日に何回服を汚され、着替える羽目になるかわからない。そのために先生達には共用の制服が用意されているし、詩織もたくさん着替えを用意していた。

はず、だったのだが――

「えっと……あれ？」

ロッカーの中は妙にがらんとしていた。

内部を探る手に物足りなさを感じ、詩織は慌ててロッカーの中を覗きこむ。そこにぎっしり詰まっていたはずの着替えはほとんど底をつき、ジャージの上着と替えのエプロンだけしか残っていなかった。

「あ……そっか……」

昨日の夕方、別の子供達と一緒に泥遊びで汚してしま

い、上下着替えたばかりだったのだ。

その前に教室の中でお遊戯をしていた時に元気のいい男の子に袖を引っ張られ、カーディガンがはつれてしまった。あと一式あると思っていた着替えは、もうその一部だけしか残っていない。

(……えっと……)

塗れた下半身を無意識にさすりながら、詩織はその場に立ち尽くす。着替えようにも服はなく、かといって下半身は水浸しの泥だらけ。

冷たく湿って肌に張り付く布地はお世辞にも快適とは言えないし、子供達の相手をするのにこのまま不衛生な格好でい続けている訳にもいかない。

(ど、どうしよう……)

先生達の留守をひとりで与ることになった新米見習いの『しおり先生』は、突如訪れた予想外の事態に直面し、ロッカーの前で困惑を隠せなかった。



(……ううう……なんか、すかすかするよお……)

結局。詩織は完全に着替えることを諦めるしかなかっ

た。被害が壊滅的だったジャージと下着だけを脱いで洗濯機に放り込み、先生達の共用の私服である丈の長いスカートに身をつける。

自分のものではないスカートは、先生たちの古着のひとつらしく、あまり活動的とは言えないものだ。

どうにも足元が落ち着かないが、贅沢は言っていられなかった。エプロンを上から付けて、なげなしの補強とする。

替えの下着は見つからず、下着は脱いだまま——つまり、詩織のスカートの下は生まれたままのすっぽんぽんである。スカートの裏地が直接下腹部に触れるたび、ひやりと風が脚の間を通り抜け、妙な不安感がどうしても拭えない。

(……はあ……)

ガチャリ、ロッカーを締めて更衣室を施錠し、詩織は歩き出した。

胸の中で大きく溜め息。落ち着かない足元を庇うように、そっとスカートのお尻を押さえる。

普段、あさがお園での仕事のために考えて詩織は下着に活動的なショーツを選んでる。しっかりした布地の感触は子供達と一緒に走り回る時にも心強さを与えてく

れていた。それがなくなってしまったことで、急に自信まで失われてしまったかのような錯覚まで覚える。

しかし、いくらなんでもあんな泥まみれになったショーツを穿いたままにいる気にはなれなかったし、かといってほかに穿くものはない。

頼りない足もとの感触に、なんとなく地面までもがふわふわとしているような違和感まで覚えてしまう。長いスカートが覆い隠しているとは言え、その内側では大切などころがすっかり丸出しという状況は、女の子にとって危急存亡の秋といっても過言ではないのだが——

(たぶん、お洗濯なら2時間くらいで乾くし……それまで我慢しよ……)

幸いと言つべきか、不幸にもと言つべきか。理由あってまだあまり異性というものを意識していない詩織にとって、それが重大事であるという認識は薄かった。小さな頃から子供達と触れ合う毎日であり、純真な彼らに囲まれていたこともその理由のひとつかもしれない。

ここには子供達しかおらず、少しくらいならきつと平気だろう、という甘えもあったことも否めない。

それがどんな結末をもたらすか、考えを巡らせることもせずに。詩織はこの事実をあまりにも軽く捉えずに

いたのだ。

——そして。

詩織を見舞う災禍、その予兆となるべきものは、前触れもなく唐突に訪れる。

ぶるるるっ……

「あ……っ」

不意に、足元から込み上げてきた感触に、詩織は軽く身をよじった。きゅんと下腹部を伝播する甘く鈍い痺れ。脚の付け根に響く切ない感触。

(うう……濡れたままでいたからかな……そういえば、さっき結構お茶も飲んじゃったし……)

恥骨をじんと震わせるくすぐったいような痺れに、詩織はその場で腰を揺すった。

水たまりの上に転んだあと、詩織は子供たちの世話を優先していたせいですぐに着替えることができなかつた。きつとあれで腰を冷やしてしまったのだ。休憩時間に大崎先生の差し入れてくれたお茶が美味しくて、何倍もおわりをしてしまったことも思いだされる。

(……トイレ……っ)

長いスカートが揺れ、さらりと剥き出しの腿を撫でる。その下で何も身につけていない少女の下半身が、敏感に反応を拡大した。

高まりはじめた尿意に、詩織はわずかに顔を赤くした。
(……まだ、大丈夫だと思っけど……)

下腹部をじいんと伝う『お手洗いの欲求』の具合を確かめつつ、詩織はそそくさと方向転換した。子供達の呼び声を背に歩き出す。

「でも、やっぱり今のうちに行っておいたほうがいいよね……」

このまま表に出たら、また子供達の取り合いにあって動けなくなってしまうかねない。先に用を済ませておくに越したことはない、詩織は洗面所横の共用トイレへと足を向ける。

が。

まるでそれを見咎めるようなタイミングで、廊下に子供達の声が響いた。

「あーっ、お姉ちゃんいたー!!」

「なー、どこ行ってたんだよー! はやくはやく!!」
リョウタとアカネ。ついさっき、詩織の手を引っ張っ

ていたふたりだった。

まっすぐに走ってきたふたりは、右と左、図ったように同じタイミングで詩織の身体にぴよんと飛び付く。

「ちよ、廊下は走っちゃ……きやんっ!?!」

「ねえ、おねえちゃん行こうよ、はやく、ねえはやく!!」

「わ、わあ!?! ひ、引っ張らないでっば!! す、スカート握っちゃダメ!!」

同時に左右から、かなりの力で両手を引かれ、詩織は倒れるのをこらえるので精一杯だ。

どうやらアカネもリョウタも、詩織がいちど事務室に引っ込んでいるあいだもだいぶあちこちを探しまわっていたらしい。二人はすっかり待ちきれない様子で詩織をせかすように玄関の方へとぐいぐいと手を引っ張る。

その下には何も身につけていないスカートの裾を掴まれ、さすがに焦った詩織は慌ててエプロンの上から布地を掴む。

「え、ええと、リョウタくん、アカネちゃん、ちよっと待って……!」

ちらり。わずかに脳裏を掠める不穏な気配。このままじゃまずい、わけもない強い予感と共に、詩織はぐっとその場に脚を踏ん張り、二人を呼び止めるように声をか

けた。

「ねえ、まって! 先生ね、ちよっと先に、お手洗いに行きたいの……!」

振り返った二人に視線を合わせ、言い含めるようにゆっくりと。

真摯にその目を見つめて、口にしたその言葉は——
「そんなのいいから!!」

「そうよ、お姉ちゃんなんだからガマンしてよ!! ねえ早く!!」

想像以上にあっさりと無視された。彼らにとつて、詩織の都合など気にしている場合ではないらしい。

「い、いいからって……きやあっ!?!」

あまりに勢いよく遮られ、呆気に取られてしまった詩織を、二人は力を合わせて玄関へと引きずってゆく。

「ひっ、引っ張らないでっば、危ないからっ!」
「先生、こっちこっち!」

たとえまだ小さな子供でも、なにかに夢中になっている時のエネルギーはすさまじい。

まして両手を掴んで二人がかりなのだ。詩織はずりずりと引きずられるまま、広間から続くベランダへと引っ張り出されてしまう。

庭に面したベランダは、すでにたくさんの子供達が騒がしくも楽しげに遊んでいた。

「ほらおねえちゃん先生、これ、これ見て！ ねえ、こつちだよ!! もう、遅いつてば!!」

「わあ!? あ、アカネちゃん、引つ張ったら危ないんだから……っ!」

「ちがうのー! ほら、おねえちゃんはやく!! 早くしてよお!!」

「あ、あのね、だからリョウタくんもちよつと待って……きやあっ!」

躓きかけた爪先がサンダルを履くやいなや、二人は見事なコンビネーションで詩織の両手を掴み、そのまま表へ走りだす。バランスを崩しかけながらも、詩織はどうにか転ぶのをこらえて二人に付いてゆくしかない。

(うう……しょうがないや、ちよつとの我慢だもん……) あまりに強引な様子の二人に、とうとう詩織も諦めざるを得なかった。それに、こうまでしてふたりが『しおり先生』を急がせ、一緒に過ごしているのを無視するのはなんとなく気が引けてしまう。

じん、と、じわじわ重みを増していくように感じられる下腹部に、後ろ髪を引かれながらも。

詩織はリョウタとアカネに引つ張られるまま、あさがお園の庭へと出た。

▼
2

「ね、ねえ……リョウタクくん、ちょっといいかな……」
 「あー!! しおり先生立っっちゃだめ!! ほら、ちゃんと持ってて!!」

「え、えっと、その……」

あれから30分あまり。詩織は子供達に囲まれたまま身動きが取れずにいた。

園内の庭にあるすべり台付きの砂場では、リョウタクたちのグループと、アカネたちのグループがそれぞれに大好きな『しおり先生』の取り合いっこをはじめている。

「次、次こっただからね! しおり先生っ!」

「まってよ、まだ終わってないんだぞー!」

「んっ……わ、わかったから、順番ね。ふたりとも、順番をきちんと守ってね……?」

(ふう………)

元氣いっぱい走り回る子供達の間、前屈みになった姿勢に、エプロンとスカートの端を折り込んで、ぎゅっ

と寄せ合わされた詩織の膝は、落ち着きなく左右に擦り合わされていた。

リョウタクとアカネの二人が詩織に見せたがっていたものは、あさがお園のみんなで協力して築き上げた砂のお城だった。普段のお遊戯の時間にできるものとはひと味もふた味も違い、砂場の砂を全部かき集めて作られたお城は威風堂々の6階建て。一番上の屋根のてっぺんは詩織の腰近くまである大きさだ。

子供達にしてみればそれこそまるで見上げるような高さなのだろう。みんなはお城のあちこちにミニカーを走らせ、お人形を並べて楽しそうに遊んでいる。

どうやらリョウタクとアカネはこのお城の建造の発案者らしかった。『しおり先生』のやってくる日を楽しみにして、一緒に遊ぶためにみんなが力を合わせて作り上げた大きなお城。子供達はすっかり夢中になって詩織の服の裾を引いては声をかける。

「はい、お姉ちゃんっ、これっ!!」

「あ、ありがとう……」

おままごとをしている子供から泥団子を受け取り、詩織はお礼を返す。ちゃんと『もぐもぐ』と食べるフリをしてあげなければいけないが、下半身を襲う切羽詰まっ

たざわめきのせいで、少女の返事はどこか上の空だ。

(や……ま、また、来ちゃうっ……！)

ごぼり、湧き上がるイケナイ感覚が少女の下腹部へ押し寄せる。脚の間に巻き込んだスカートのお尻が、ぎゅうっと強くかかるとに押しつけられた。

そわそわと落ち着きなく揺すられる腰。小刻みに足踏みを繰り返す爪先。何度となく、建物の方を窺う視線。

(っ……どうしようっ……)

端から見れば詩織の様子は明らかにおかしい。不幸な偶然によってスカートの下に下着を身につけていない事の不安ももちろんあるが、それ以上に詩織を困惑させていることがあった。それは――

(と、トイレ、トイレ行きたい……っ！)

下腹部を執拗に刺激する、強い尿意。

あれからわずか数十分。見る間にその存在感を増した排泄欲求は、少女の下半身を執拗に責め苛んでいた。

「ん……っふう……」

自然と荒くなる息を抑え込み、詩織の唇がぎゅゅと噛み締められる。

砂場の上にはしゃがみこんだスカートのおしりは、落ち着きなくもじもじと揺すられ、左右にくねる腰の動きは

徐々に大きくなってゆく。

(だ、だいが、辛くなって、きちゃった……っ)

脚の付け根にぐっと力を入れてみたり、さりげなく肘のあたりでおなかをさすってみたり。

少しでも下腹部に負担をかけないよう、詩織はしゃがみ込んだ姿勢の微調整を繰り返しながら、断続的に押し寄せる尿意の波を懸命にやり過ごしていた。

「っ、んう……っ」

きゅん、下腹部に膨らむ水圧が増し、刺激は閉じ合わされた脚の付け根の奥にまで伝播する。おんなのこの出口を内側からノックするイケナイ刺激に、詩織は思わず喘ぎ声を漏らしかけた。

すでにかなりの水量を蓄えつつある少女の恥骨上のダムへ、また恥ずかしい液体がごぼごぼと音を立てて注ぎ込まれてゆく。

(な、なんで、ッ、はあうっ……こんな、急に……っ)

庭に出る前から、軽く尿意を覚えていたことは確かだ。しかし、こんなにも急速にそれが強まるなんて予想もしていなかったのだ。

いつもなら、まだこれくらい、全然、大丈夫なはずなのに。戸惑う心とは裏腹に、下腹部に膨らむ水圧は、加

速度的にその存在感を増してゆく。

「っ、はああっ……」

もぞりと揺すった腰の動きに合わせ、詩織のおなかの中でたぶんっ、と大量の熱湯が揺れ動く。

まるで、おなかの中におしっこのポンプができてしまったかのよう。

ダムに地下水を吸い上げるがごとく、詩織のおなかのなかでは、汲み上げられた羞恥の熱湯が刻一刻と水量を増し続けていた。

「……ね、ねえ、アカネちゃん？ あのね、先生、ちょっとご用事があるんだけど……」

「せんせえ！ ねー！ ほら、今度はしおりせんせえの番だよっ!! ほらあ、はやくー!」

席を外そうとして詩織が腰を浮かしかけるたび、リョウタとアカネは目ざとくそれを見つけて大きな声でそれを制した。大好きな先生がどこかに行ってしまったように、子供たちは口々に声をかけ、次はボク、次はわたしとその周りに集まってくる。

「じゃあ次ね、次!!」

「まって、あたしのが先よお!!」

「ちがう、ボクだよお!!」

「ずるいよ、わたしもー!」

園長先生をはじめ他の先生達がいけないこともあって、子供達は全員詩織の元に詰めかけるばかりだ。大勢の子供達に囲まれて、無理矢理その場にしゃがみ込まされてしまい、詩織は思うように身体を動かすこともできなかつた。

「じゅ、順番だよ、順番っ……! ね、ねえ、そんなに押さないで……んあう……っ!」

女性保育士の大きな悩みにしてトラブルの原因となるひとつに、トイレの問題があることをご存じだろうか。

預かる子供達の——ではない。それらも勿論大切なことではあるが、この場合は保育士自身のトイレについての話だ。

排泄にまつわる問題は、この職業に関わる女性達の大きな悩みである。人手不足のこの業界、少ない人数で多くの子供達の面倒を見ねばならない。忙しなく走り回る子供達からはひとときも目を離すことはできず、ただでさえ山積みの仕事は忙しさを増す。

わずかな休憩時間すら自由になることは稀で、当たり前のように半日、ひどい時は十数時間、トイレに立つ暇も与えられないことも多いという。

彼女達の職業病のひとつに、膀胱炎があるというのも当然と言えよう。それほどに、この職業にあつてトイレ我慢というのは切実な問題なのである。

詩織もまた、未来の保育士のタマゴとして、その苦難に直面していた。

「んう……っ」

スカートの下、なにも穿いていない剥き出しの下半身。その閉じ合わされた脚の付け根の奥、女の子の部位が、高まる尿意に連動するようにぎゅんと疼いて、ひくひくと震えはじめた。

「っ……だ、っ」

(ダメえ……ッ!!)

スカートの裏地に押しつけられる剥き出しの素肌、何も覆うもののない股間。そこが敏感に反応するのを感じ、詩織はぎゅっときつく腿を寄せ合い、懸命に膝を擦り合わせる。抑えきれない尿意の波が振動になって、少女の腰を左右にクネらせた。

「はあ……っ、ふう……っ! ……うくっ……ううっ、はあ、ああ……っ」

エプロンの裾を押さえて、さりげなく脚の付け根をしやがんだかかたに押し当てながら。ぐりぐりとそこに体

重を乗せ、詩織は口元を押さえた手のひらの下で熱い息をこぼす。額にはわずかに汗が滲み、口の中はカラカラだ。

まるで全身の水分が絞り取られて、身体の一か所に集まっていくかのよう。

「っ……」

そんな少女のスカートの奥では、ぎゅうっと寄せ合わされた太腿が、なんども強く押し付け合い、擦り合わされている。

そっとエプロン越しに確かめた下腹部の感触は、砂を詰め込んだかのように硬く、張り詰めた水風船は身体の外側へとせり出しはじめている。

(や、やだ。っ……こんな、なんで……っ、なんで……こんな、急に、おトイレ……っ)

それでも、切っても切れない悩みであるからこそ、詩織は今日のこの日まで、そのための備えを欠かしたことはなかった。

3年前のあの日、バス遠足で衆目に晒してしまった屈辱の姿、地獄のような羞恥。詩織はそれを二度と繰り返さないように、懸命に努力を重ね、厳しい特訓をしてきたのだ。

(へ、変だよ、っ、これくらい、いつもなら、まだ全然、がまん、できる、はず、なのにな……)

もう、トイレのことで、おしっここのことで、決して恥ずかしい目に遭わないように。詩織は徹底的に排泄のトレーニングを続けてきた。

辛く苦しい日々の中、少女は並々ならぬ努力で『そこ』を鍛え抜き、ついには一日中トイレに行かなかつたとしても平気でいられるほどになった。

いまや詩織は、並の成人女性の平均値と比較しても、遥かに大きな保水量を誇るダムと——鉄壁の防御を誇る強靱な水門を身につけていた。

だから。ほんのついさっき——学校を出る前にきちんとトイレに入ったはずなのに。こんなにもすぐに脚の付け根のダムが『限界』を訴えるなんて、詩織には想像もつかないことだったのだ。

「んうう……つくうっ」

(だ、だめ……っ、ど、どんどん、辛くなってきちゃう……っ)

気のせいではないか、勘違いではないか。何度もそう思おうとする詩織だが、高まる尿意は一向に収まる様子がない。

普通なら、ある程度の欲求の『波』——“したい”と“どうでもない”の振幅があるはずなのに、いま詩織の下腹部を襲う尿意は、まったく休みなく際限なく高まり続けているのだ。

(ど、どうして、っ、こんな……っ)

詩織の想像を遙かに超える速度で、急激に高まり続ける尿意。まったくの予想外のこの状況を生み出した原因は、詩織が数時間前に口にしたお茶であった。

大崎先生が家から持ってきた、美容にいいという触れ込みの健康茶——体内の老廃物の代謝を促すというこのお茶は、その実、健康食品として扱うことが怪しいほどに猛烈な利尿作用を備えたものであったのだ。

通常、一般的な女性であれば、コップに半分もこれを口にすると、わずか数十分後にはたちまちトイレに駆け込む羽目になる。それも、一度ではなく何度も。

『しおり先生』のお仕事のため、学校帰りの道を急いでやってきた詩織は、これを喉が渇きに任せて何杯もがぶ飲みしてしまったのだ。

健康茶の利用作用は、思春期の少女の身体に靦面に効果をもたらし、摂取からわずか1時間で詩織の下腹部のダムは危険水域を迎えつつあった。

(……で、でちゃう……っ、そんな、うそ……っ、っくうう……っ、こ、これくらい、がっ、我慢っ、できるはず、なのにい……っ！)

きつく噛み締められた奥歯が震える。

スカートを挟むように激しく擦り合わされる内腿。しかしその閉じ合わされた奥底で、少女の『おんなのこ』の部位——乙女の花弁がびくんと震え、際限なく高まり続ける内側からの水圧に、ぷくっとして押し上げられてゆく。(あ、っ、だめ、だめえ……っ、で、出ちゃダメ、だめえ……っ!!　っっ、くうううう……っ!)

まるで、ぐらぐらと中身を沸き立たせるティーポットを、なおコンロの火にかけているかのような、もどかしくも激しく切ない尿意。ポットの口ぎりぎりまで注がれた羞恥のレモンティーは激しく沸騰し、いまにも『注ぎ口』から吹きこぼれてしまいそうだ。

「んうううう……っ!」

きつく唇を噛み締め、詩織は自分の意志とは無関係にヒクつきはじめる排泄孔を、エプロンの布地の上からぎゅっと押さえつけた。

スカートの奥で膨らむおしっここの出口を押さえ、水圧でばんばんに張り詰めた下腹をそっと優しく擦るよう

してなだめる。

砂場の上、しゃがみ込んだ姿勢のままわずかに前屈みとなり、後ろに突き出したおしりをクネクネと左右に揺すって、詩織は浅く息を繰り返し、危険水位を突破しつつあるダムが決壊を懸命に防いだ。

「はあ……っ」

そうして、しばし。

我慢の綱引きののち、なんとか小康状態を取り戻した下半身に、安堵の息をこぼす詩織。

この事態を解決するためには、とれる手段はひとつだけ。とにかく一刻も早くトイレまで戻ることである。それ以外に助かる方法はないのは明白だった。

(っ……だ、だめ、トイレ……っ……お手洗い、っ、早く、……、はやく、しないとっ……!)

詩織の脳裏を、かつての惨劇の記憶がよぎる。足元を濡らす雫、迸る水流、たっぷり水を吸って肌に張り付く布地、噴き出す熱湯、びしょ濡れになる下半身。

もう二度と、二度と、あんなコトはあってはならないのだ。……絶対に、絶対に繰り返してはいけない。

「ご、ごめんなさい、みんな、ちょっと待って——」
「しおり先生!　なにやってるの!?!　ほらあ、早く!!」

「ねえせんせい、そんなのよりこっち来て！ こっちだつてば!!」

しかし、目を輝かせる子供達が四方から詩織を奪い合うようにエプロンを掴み、放さない。みんな大好きな『しおり先生』と一緒に遊びたくてたまらないのだ。リョウタなどは詩織の腕を掴み、そのままぐいぐいと引きずっていかうとする。下手に拒絶すれば、大騒ぎに発展しかねない。

(っ……ま、まだ、先生、戻ってこないの……?)

せめてもう一人、先生が遊びに参加してくれば抜けだすチャンスもあるというのに。何度も正門の方を窺う詩織だが、しかし少女の絶体絶命の窮地にも関わらず、助けが駆け付けてきてくれる様子はなかった。

(だめ、しっかりしなきゃ、わたし一人でも、ちや、ちやんと留守番できるって、言ったんだし……っ……んあ
ああ……っ!)

救援の様子が無いことに酷く落胆しながらも、努めて、尿意のことは考えないように使用とする詩織だが――

膀胱をパンパンに膨らませ、腰の上のダムの中でたぶんっ、たぶんっ、と揺れ動くおしっここの存在感はあまりに重く、忘れてしまえるはずがない。

何度考えまいとしても、腰骨に響く甘い痺れは、避けられない決壊の瞬間を思い起こさせるばかりだった。

(んっ、んんう……っ、はああ……)

遠くない爆発の瞬間をせめて少しでも先延ばしにしようとして、詩織はサンダルのかかとでぐりぐりと地面に押し付ける。

軽く腕をつねって痛みでごまかそうとしても、おなかの底、たった一つの出口である水門へとにずっしりとかかるおしっここの重みは消えてくれない。

「ね、ねえっ、まって、わたし……っい、先生ね、お、おトイレが――」

焦る心と共に。詩織が語気を強めて、尿意を口にしようとした、その時だった。

庭に面したあさがお園の建物。開け放たれていたベランダのガラス戸の向こうから、来客を告げるチャイムが響く。

「っ……、」

詩織の脳裏を、電流のように思考がひらめいた。左右を取り囲む子供たちを押しつけるようにして、少女はその場に立ち上がる。

「ご、ごめんね！ ちょっとどいて！ お、お客さんが、

来たみたいだからっ！」

(っ、や、やった……っ！)

まさに、千載一遇のチャンス。この場を離れて、用事を済ませに行くための格好の口実。

これで、これでおトイレに行ける。おしっこできる。

もう我慢しなくても大丈夫だ。

(おトイレ、おしっこ……っ！)

「せ、先生、行ってこなくちゃ！ みんな、しばらくここで遊んでてね……！ 外に出たり、ケンカしちやダメだよ!! いいね!!」

子供たちに短く言い聞かせ、詩織は踵を返して建物の中へと走り出した。

くねくね、もじもじ、はつきりわかるくらいに膝を震わせ、腰を揺すり、突き出したおしりを左右によじりながら。

——先生、これからおトイレに行つて来るね！

——先生、オシッコしてくるからね！

来客なんて口実だ。ご用事なんて嘘だ。足早に立ち去る詩織の背中、もはや少女のオシッコ我慢が限界であ

ることを力いっぱい主張していた。



来客は、園の生徒の一人であるシズカの保護者だった。銀縁の尖った眼鏡に濃い化粧をした彼女はシズカの大叔母に当たるといふ。確か、ここしばらくシズカは家の事情であさがお園をお休みしていたはずだが——

「……ねえ、あなた？」

「は、はいっ」

明らかに『おばさん』然とした彼女は、玄関にかけた詩織を見るなり、露骨に不審そうな線を向ける。じろじろと遠慮なく睨みつけ、初対面でお不満を隠そうともしない態度は、詩織が苦手にする類の相手だった。

「あなた、どなた？」

「あ、あの、私、前原と、いつて……、こ、ここの、お仕事のお手伝いを……っ」

「ふうん。……見たところ随分とお若いようだけど、この先生なのかしら？」

「い、いえっ、あの、私は、お手伝いをさせてもらっているだけで……っ」

応対をしながらも、詩織の意識はすでにこの場にはなく、背後の通路の突き当たりにある洗面台、その脇のトイレの個室の中へと飛んでいた。少女の本能は白い清潔な洋式便器に腰を下ろし、思っさま黄色い水流を噴射する光景を思い描く。

(つ、トイレ……ッ、早く、トイレ……つ)

一刻も早く用事を済ませて、今すぐにもトイレに駆け込みたい。おしっこをしたい。おしっこがしたい。

そう思い、足踏みを堪えながら訊ねる詩織だが――

「あ、あの、どんなご用事で――」

「それよりも。先生はいらっしゃらないの？ あなた、お手伝いなんですよ？ わたくし、うちのシズカちゃんのこと、こちらの先生にご用事がありますの」

「え、ええとつ……」

きゆうんと下腹部で尿意が膨らむ。強烈な利尿作用が、恥骨の上のダムに恥ずかしい熱湯を汲み上げ続ける。

伸びきった膀胱が猛烈な水圧で脚の付け根へ吹き出し、そうになる水流を、鍛えた括約筋で辛うじて押し留め、詩織は口の中につばを飲み込んだ。

「あ、あの、今、ちょうど園長先生も、みんな、ちょっと留守にしています……」

「……なあに？ それ」

説明しかけた詩織を制するように、女性の低い声がそれを遮る。ぎろり。細い銀縁のレンズの向こうで、女性の視線が険しさを増した。

「ちょっと、どういふことかしら？ ねえ、ここってあさがお園でしょう？ あなた、ただのお手伝いなよね？ 先生が誰もいないのに、よそ様のお子さんをお預かりしていいいの？」

「え、いえ、そのつ、違います！ いつもは居るんですけど、今日はたまたま――」

「なによそれ、ちょっと、無責任じゃないの！ どうなってるのかしら!! たまたまで済むとおもってるの?! どうして先生が誰もいないのかしら!! ここの先生たちって、子供たちを放り出して遊びに行ってるってこと!! あなたみたいな何もわからない子に押し付けて!! どうなってるのよ、一体!」

女性は激しくまくしたてながら、自分の大声でさらに興奮していく。誤解を勝手に補強し、さらに推測を重ねてそこに勝手に怒る一方的な様子に、詩織は首を振るのて精一杯だ。

「ち、違いますつ、わ、私、いつもここで――」

「いつも!? ねえ、なによそれ、いつもあなたに任せっぱなしってこと!? ちよつと……なんなの!? どういうこと!? ねえ、これって大問題よ!? あなたみたいな子じゃ話にならないわ! はやく先生を呼んできて頂戴! ……ほら、はやく!」

「そ、そうじゃないです、園長先生、大事なご用事があって、お出かけしている間、私が——」

「ねえ、あなた、じゃああなた! 私の用事がわかるのかしら? どうなの!?」

「ひゅっ……」

いきなりすごい剣幕で怒鳴りつけられ、詩織はたまらず身を縮めた。喉の奥がひゅつと息を吸い込む。ぞくり、緊張に強張る脚の付け根が不安定に揺れる。

大きなため息とともに、女性はいらいらとその場に腕を組む。

「……ちよつと、どういうことなの? こんな酷いあさがお園に、うちのシズカちゃんを預けてるなんて……」

「で、ですから……」

震える唇を湿らせ、どうにか説明を始める詩織。だが一度ヒートアップした女性は全く聞く耳を持たなかった。詩織の言葉を一方的に遮っては、理不尽な言いがかりと

しか思えないことを次々まくしたてる。

「じゃあ、なあに!? 正式な資格もないのに、あなたの子供たちのお世話をしてるってこと!? ちよつと……どういうことなの、なんなの、このあさがお園……!!」

「い、いえ、だからそれは……」

「何が違うの! あなたまだ学生でしょう!? それを無理矢理働かせてるの? ねえ、それって犯罪じゃないの!? ちよつと……どうなってるのよ!」

「だ、だから……」

「なによ! ねえ、あなた! 口答えできる立場だと思ってるの?!」

「っ、あ……う……」

加えて、下腹部に切羽詰まった尿意を抱えた詩織では、思うように思考がまとまらず、言葉も出てこない。

強烈な言葉に晒されて、委縮した少女の下半身は、先程にもまして猛烈な尿意に晒されていた。

(あ、っ、あ、だ、だめ、っ、だめえ……っ)

皺の寄せられたエプロンの下、ひっきりなしに太腿が擦り合わされ、覚束ない手のひらが、さすさすとお股をさする。

異常なほどの速度で高まり続ける尿意と共に、もう一

つの事実が詩織を戸惑わせていた。

(っで、でちゃ……っ、でちゃ、う……ッ)

でちゃう。でる。おしっこが、でる。

(と、トイレっ、トイレ、といれ、はやく、おしっこっ、
トイレ、だめっ、トイレ、といれえ……ッ！)

下着を穿いていない、ということ。

——それが、どれほど尿意の、排泄の呼び水となるのかということだ。

股間を覆い包むたった一枚の布きれ。大した締め付けも圧迫感もない、柔らかく清潔な布地。しかし、それが無いというだけで、少女の下半身はこうも容易く尿意に屈し、しゆるしゆると水門を緩めて熱い雫をほとばしらせそうになってしまう。

汚れてしまったソックスやタイツを脱いでいたのも災いした。無防備なスカートの中、素裸と同じ状態の詩織の下腹部は、わずかな外気が触れるだけでぞくぞくと震え、ますます生理現象を加速させていく。

「ちよっと！ 聞いているのかしら!？」

「は、はい……ッ」

あさがお園の建物を震わせるほどのキンキン声。大声で怒鳴りつけられ、詩織はその場に伸び上がった。

「なあに……？ ちよっと、なんなの？ ねえ、本当に、

どういう教育をしているの、この園は……？ あなた、人と話す時はちゃんとこっちの顔をみなさいッ！」

「っ……あ、あのっ」

「勘弁して頂戴……こんなみっともない子に、うちのシズカちゃんが教わってるの？ ねえ、なんなのあんた、さっきからそわそわして……そんなにあたしの話が聞きたくないのかしら!？」

「そ、っ、そう、じゃっ」

そうじゃない。そうではない。

詩織はただ、オシッコがしたいだけだ。健康茶の凄まじい利尿作用によって猛烈に膨らみ続けるおなかの中の水風船を空っぽにしたい、それだけだ。

出口を閉ざされた乙女のダム、そこに一方的に注ぎ込まれる羞恥の熱湯。膨らみきった膀胱はさらに膨らみ、少女のおなかの中には収まりきらずに身体の外へとみっともなくせり出してゆく。

内臓を圧迫してせり上がる水風船は、呼吸にすら反応して尿意の呼び水とした。ぜいぜいと荒げる息に連動してスカートの下、剥き出しの脚の付け根に響くイケナイ誘惑。じんじんと疼く甘いむず痒さ。

おしっこ、トイレ。オモラシ。それ以外のこと、考
えられなくなっていく。

「つうう……つく、はああ……」

「ねえ、さっきから一体なんなの？ 全然わからないわ
よ！ 声も小さいし聞こえないし！ あなた、それでも
ここの先生なの？ ねえ、違うの？ はっきりしなさい
よ！ あなたがそんなだから、うちのシズカちゃんが園
に行きたくないなんて言い出したんじゃないの？ ちょ
っと、聞いてるのかしら!？」

機関銃みたいに次々にぶつけられる一方的な言葉。

今すぐこのおばさんをドアの外に締め出して、背後の
トイレに駆け込み、白く暖かな保温便座に思いっきり腰
かけて、ぶじゅああああああつと溜まりに溜まったおし
っこを噴射させたい。

スカートの裏地に擦れる剥き出しの股間、下着を身に
つけていない下半身は、今にもぷくりと乙女の花弁を押
し開き、『ぷしゅっ』と熱い雫を迸らせそつになる。

中腰になり、後ろへ向けておしりを突き出し、くねく
ねと激しく揺すりながら、詩織は懸命に、排泄の誘惑に
抗う。

（お、おしっこ、トイレ、っ、おしっこっ、おしっこ、

でる、でちゃう、でちゃうううっ……）

おしっこがしたい。トイレがしたい。

もう、我慢できない。漏れちゃう。出ちゃう。熱く疼
く股間の先端がひくひくと震え、閉じ合わされた『おん
なのこの部位』がだらしなく緩みそうになる。グラグラ
湧き立つ羞恥のホットレモンティー、今にも噴きこぼれ
そうな恥ずかしい水圧に負けて、脚の付け根の水門が押
し破られそうになる。

でも。詩織は、園長先生たちの留守を任せられたのだ。

ちゃんとその仕事を果たさなければいけない。

みっともない格好を晒すことなく、きちんと自分の仕
事をしなければいけない。

あまりに一方的で、身勝手な、理不尽な言い分とは言
え。大滝あさがお園が誤解されたまま、大きな問題にさ
せてしまっわけにはいかない。そこで先生としてお手伝
いする詩織のせいで、そんなことがあってはいけない。

だから、詩織は——玄関の前、小刻みに足踏みを繰り返
しながら、すりすりとお股をさすりたくなるのを懸命
に堪え、左右に譲られる身体を押さえ込んで。

（だ、大丈夫、が、がまん……がまんしなきゃ……っ、

お、おしっこ、大丈夫……ま、まだ、ガマン、出来る

から……ッ！)

一人前の保育士さんになるために。あんな恥ずかしい
思いは、もう二度と繰り返さないように。

トイレのことで、オシッコのことで困らないように、
詩織は必死に特訓したのだ。そのために、どれだけオシ
ッコがしたくっても平気になるように訓練した。

恥ずかしい格好なんかしない。みっともないことはし
ない。まだ大丈夫。ちゃんと我慢できる。おトイレ、行
かなくても平気。

そうやって、自分に言い聞かせながら。

「あ、あの、私は……っ」

火の付いたように怒り叫ぶおばさんの誤解を解き、訳
を説明し、きちんと納得してもらうまで。

詩織は、喉の奥に悲鳴を飲み込んで、オシッコを我慢
し続ける。

【奥付】

「泉会のおねえちゃん先生 試し読み版」

発行日:平成30年3月26日
初出:し〜むす!16

発行:シズクのおと

(<http://shizuku44.blog114.fc2.com/>)

本文 クロギリ (シズクのおと)

Twitter: @kurogiri44

表紙・挿絵イラスト こおりみず様 (氷倶楽部)

Twitter: @kohri_Ms

pixiv ID: 23011197

(kohri.club@gmail.com)

※本書の内容はフィクションです。実在する人物、職業、団体、地名、制度などとは関係ありません。
※未成年者の閲覧を禁じます。

シズクのおと

- Shizuku Note -